
電腦遊客

万墨人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳遊客

【Nコード】

N0452Z

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

仮想現実構築されたのは、江戸時代！そこには江戸町人、侍、商人などが生活し、現実世界からは？遊客？と呼ばれるプレイヤーが、江戸の暮らしを体験する。この江戸仮想現実を創設したメンバーの一人、鞍家二郎三郎は、悪党一味の動きを探るため、活動を開始したのだが……。

ちゃぷりと、微かな水音を立て、船頭の留吉とめきちが艀ろを動かした。きい……と、小さな軋み音に、留吉は全身で慄おのいて、俺を見た。

「二郎三郎の旦那……。どうしても、いらっしやる御つもりでござんすか？」

俺は無言で頷いた。むつつりと、俺が押し黙っているので、留吉は仕方なさそうに、ゆつくりと艀を動かし、船を進める。

若い。年の頃は、二十歳を多くは過ぎてはいまい。遅しい上半身に腹巻をして、下帯一丁で、月代は丁寧に剃り上げ、丁髷は片側に垂らした流行はやりの髪形をしている。

暗い。

星はあったが、空に月はなく、目の前はべつとりとした闇に覆われている。背後で、留吉がはあはあと荒い息を吐いているのが、はつきりと判る。

舟の舳先へさき辺りに蹲またがっている俺は、黒地に伊呂波いろは四十八文字が、白く抜かれている着流し姿で、頭は蓬髪にして丁髷を結った痩せ浪人姿だ。

俺の名前は鞍家くらかじ二郎三郎。ご想像通り、気楽な浪人である。ただし普通の浪人とは、ちょっと違いがあるが……。

ここは品川の、人里から少し離れた川辺の、葦原あしだ。人伝に耳にしたのは、この辺りではなぜか神隠しや、幽霊などの噂が絶えず、そのせいか昼間でも人氣が無く、閑散としている。ましてや真夜中だ。信じやすい人間にとっては、近づくのも恐ろしかろう。

何しろ、近くには鈴ヶ森刑場がある。従って、昼間でも近づく町

人はほとんどいない。

かさこそと、川舟の舳先に生い茂った葦が触れる音がしている。

「もそつと、右へ寄せろ……」

小声で命じると、留吉はびくりと身を震わせた。

「旦那……真つ暗闇でござんすよ。お見えになっっているんですかあ……？」

ああ、と俺は低く答えた。

今、俺の両目は、暗視モードにされていて、星空ほどの光でも、はつきりと周辺の様子は見て取れる。増幅された光に、葦の穂先が、ぬれぬれと光っているように見えている。密生した葦原の先に、向こう岸が見えて、荒れ果てた廃寺が、暗闇に立ちはだかっている。

背後の留吉が震える声で訴えた。

「旦那、よろしきようや！ 命あつての物種つて言うじゃありませんか……」

俺は小さく舌打ちをした。やはり、他人を頼むものではなかった。舟を漕ぐ技術は修得していなかったため、度胸自慢の留吉に頼んだのが間違이었다。留吉はすっかり、怯えきっている。普段から「俺には怖いものなど、何にもねえ！」と勇んでいたのに、それならと依頼したところ「任してくださいえ！」と胸を叩いたのだが、今になって、完全に恐怖に支配されている。

俺は船板に横たえていた両刀を掴むと、腰に手挟んだ。ぐいつ、と帯にこじ入れ、立ち上がる。俺の動きで、船が少し揺れた。

ただそれだけで、ひいつ……と、留吉が押し殺した悲鳴を上げる。
俺は振り向いて、留吉に命じた。

「一時間だけ、待っている。それで、俺が帰らなかったら、一人で
戻れ。あとは火盗改の榊原源五郎さかきげんごろうに話をすればいい。判るな？」

「一時間？ ああ、半刻のこつてすね。わ、判りました……」

俺たち現実世界の【遊客】プレイヤーは、どうしても江戸の時制に慣れてい
ない。江戸のNPCノン・プレイヤー・キャラクターたちは、俺たちと付き合ううち、俺たちの物の
言い方に、合わせてくれている。俺は仮想現実江戸創設者の一人だ
が、緊張していると、つい現実世界の物言いになる。

俺の視界に、留吉の丸い顔が背後からの遠くの町の灯火を背景に
黒々と見えている。

町の灯火は、俺の増幅された視界では、眩しいほどにぎらぎらと
光り輝いて見えていた。留吉は顔中から冷や汗を噴き出させ、その
ため皮膚がてらてらと光っていた。両目の瞳孔がぼっかりと開き、
小さく膝頭が震えている。

俺はぐつと留吉に近づくと、力を込めて言い聞かせる。

「いいか、お前はここでじっとしていればいいんだ！ 震えるな！
落ち着いてろ！」

俺の言葉に、留吉の震えがぴたりと止まった。俺のような本物の
仮想人格ベルシナだけが、留吉ら江戸のNPCノン・プレイヤー・キャラクターに対し、圧倒的な気迫能力を
発揮できる。

しかし、俺は滅多にこの能力を使おうとは思わない。

何と言っても、俺たち現実世界の【遊客】は、仮想現実の江戸に
生きるNPCたちに対し、絶対的優位に立っている。だから、気迫
を発揮して言いなりにするのは、極めて卑怯な気がするからだ。

俺は懷に手を入れ、小判を一枚取り出した。留吉の手を取り、握

らせる。

「帰ったら、同じだけ渡す」

手に握らせた小判の重みに、留吉の顔が綻んだ。手の平を上下に揺らし、重みを確かめ、急いで腹巻に押し込んだ。仮想現実の江戸では、貨幣価値が本物の江戸とは少し違うが、小判一枚あれば、留吉のような若者なら、三ヶ月は遊んで暮らせるだろう。

いそいそと川舟から岸に上がると、舳もやいを結わえ付ける場所を探す。「お前の目の前に、手ごろな岩が突き出ている。それに結わえ付けろ」

指示してやると、手探りで留吉は縄を結わえた。落ち着こうとするのか、腹巻から煙管を取り出し、火打石を擦ろうとするのを俺は慌てて止めた。

「よせ！ 見咎められたら、どうする」

びくつと、留吉の動きが止まる。俺はもう一度、言い聞かせた。

「いいな。動くなよ。俺が合図するまで、じっとしている！」

「へえ……」

弱々しく答え、留吉は蹲った。

俺はそれきり、留吉の存在を頭から追い払い、目の前の廃寺に向かつてそろりと歩き出した。

二

ゆっくりと俺は廃寺に近づき、両目の暗視モードを、赤外線に切り替えた。【遊客】のみが使える、一種の特殊能力だ。

超能力とは言いたくない。あれは不可知論の領域なのだが、俺たちの能力は、完全に科学で説明可能なのだ。

一瞬で、灰色の視界が、揺らめく紅蓮の炎に包まれた荒れ寺に変化した。昼間の熱が、寺の崩れかけた塀や、屋根の瓦から放射されているのが判別できた。ほとんどは、昼間の日差しの名残りだが、廃寺の奥からは、別の熱の放射が感知される。

門を見ると、幾人かの足跡が、熱の蟠り^{わだかま}を見せ、廃寺の正面に消えている。確実に、夜になって、誰かがこの場所に足を踏み入れている。それも一人ではない。

俺は、にやりと唇を歪め、他人からは「ハイエナの笑い」と呼ばれる表情を作った。そんなに俺の顔は悪どいのかと、俺は常々疑問に思っているが、他人の評価など、そんなものだ。

ぴたりと動きを止め、耳を澄ます。

途端に、それまで意識していなかった虫の音、葦が僅かな風に揺られ、掠れる音、遠くのざわめき、風の音がわっ、とばかりに、俺の耳に飛び込んでくる。感度を上げすぎたせいだ。

俺は意識操作で、俺にとって意味のない音をカットする？ カクテル・パーティー？ フィルターを起動させた。通常、聴取できない超低音——二十ヘルツ以下の超低周波に意識を集中させる。

思ってたとおりだ！

微かな律動音^{シグナル}が、地面の下から聞こえてくる。地面に耳を押し当てると、さらに律動音は、くっきりと聞き取れた。会心の笑みが浮かぶ。その時ばかりは、俺は、狼が獲物を前にした時の、涎がたらたら口の端から垂れそうな、凄みのある笑みを浮かべているはずだ。

じわじわと、俺の体温で、辺りが赤外線放射を見せ始めたので、俺は視界を通常より、やや感度を上げた、夜目に変えた。暗視モードほど、辺りははっきりと見てとれないが、うっかり星空を見上げると、星の光さえあまりに眩しすぎるので、このほうが都合がいい。俺は門を潜り、境内に足を踏み入れた。荒れ果てた庭に、覆い被さるような木々が鬱蒼と茂っている。湿気が強いのか、ぶん、と苔の匂いが籠もっていた。

慎重に、廃寺に近づいた。
足音は立てない。

俺は自分の仮想人格をデザインする際、感覚を研ぎ澄ませた、忍者のような性格を頭に入れて製作している。多少、通常のNPCに比べれば体力は上回り、苦痛に耐える上限も高めにしているが、見かけはぱつとしない、ただの男である。

他の【遊客】は、山のような筋肉の固まりか、あるいは女と見間違ふほどの優男、女なら、目の飛び出るような絢爛豪華な美女にするのだが、俺はほぼ、現実の自分と同じ見かけにしている。

よくからかわれる長い顔。大きな口。両目は細く、狡賢そうな表情をしている。どう見ても、水も滴るいい男、とは言いかねるが、なあに、それでも、俺は結構もてるのだ。

話が横道に逸れた。

俺は全身の神経を、ぴりぴりと緊張させ、一步一步、そこに爆弾が埋まっているかのように、足を下ろし、じわりと体重を乗せると次の一步を踏み出した。

廃寺の障子は開け広げになっている。俺は土足で踏み込むと、周囲を抜け目なく見渡した。

あの柱が怪しい。

他の柱が、雨風に打たれ、今にも折れそうな枯れ切った状態なのに対し、なぜか、俺の目のつけた柱だけは、つやつやと表面が黒光りしている。何人もの手が触り、手脂が表面を保護しているのだ。確認のため、一瞬赤外線モードにすると、柱の周りには、以前の足跡が熱の残滓を見せ、微かに光っている。

顔を押し付けるようにして、しげしげと見入る。目を精細モードにして、表面を拡大する。

あつた！

目に見えるか、見えないほどの、小さな合わせ目が見てとれた。俺は指先を近づけ、爪先を引っ掛けるようにして、ぐいと力を込めた。

呆気なく、ぱたりと表面が開き、十進キーが俺の目の前に顕わになる。確実に、暗証入力装置だ！ キーの下には、カードを挿入する細い隙間があった。

俺は懷から、かねて用意の開錠セットを取り出した。指先で薄い読取装置を掴むと、カード挿入口に押し込む。読取装置のディスプレイが忙しく瞬き、電子の指先が、目の前の暗証入力装置に隠された、開錠システムをまさぐる。

ぴーっ！ と、俺にとっては、一杯に膨らんだゴム風船が勢い良く破裂したほどの音が響き、暗証を探し当てたと読取装置が誇らしげに作業の終了を告げる。

溜息のような音が洩れ、寺の床板の一部が僅かに持ち上がった。あれが入口だ！

俺は屈みこみ、床板をゆつくりと押し開けた。歯ぎしりするほど、自分でも慎重な動きである。

落ち着け！ 落ち着け！

留吉に言い聞かせた台詞を、自分に呪文のように繰り返す。

開いた！

黒々と、地下への入口が、俺の目の前に現れた。階段がついてい

る。
俺は腰の大刀の鯉口を切り、いつでも抜き打ちできる構えを取って、地下への階段に足を載せた……。

三

俺は、おっかなびつくりで、階段を降りて行く。正直、こんな冒険は、初めての経験だ。俺たち【遊客】は、NPCなど比べられないほど、抜群の体力と、運動神経を備え、様々な武道を修得している。

俺自身、北辰一刀流の達人である。しかし達人のみが到達できる、どんな危急の際にも発揮する、精神状態までは真似できない。

白状すると、一刻も早く、ここから尻尾を巻いて逃げ出したいのだ。留吉の前ではせいぜい強がっていたが、恐ろしいのは俺も同じだ。

ばたん！ と、出し抜けに背後で音がして、振り返ると、入口の天板が閉まっていた。自動で閉まったのだろうか？ それとも？

当然、辺りは真っ暗闇に包まれる。完全な暗闇に、俺は暗視モードにするかどうか、迷っていた。

どきどきどき……。俺の心臓が、胸の奥で陽気に跳ね回っている。

次の瞬間、目の前が真っ白になった。悲鳴を押し殺し、俺は両目を手で覆い、蹲った。

恐る恐る手を開くと、指の隙間から人工的な光が差し込んでくる。危なかった！ もし暗視モードにしていたら、今の不意の光をまともに見てしまい、視神経に深刻なダメージを残したはずだ。

俺は冷え冷えとした照明の下、地下通路に立ち尽くしていた。

何も知らずに連れて来られたら、現実世界のどこかの建物に迷い込んだのかと、思ってしまうだろう。コンクリート打ちっ放しの、無愛想な壁面に、床はすべすべした材質でできている。絶対、江戸

時代の工法ではありえない！

いったい、どこのどいつが、明白な違反を犯したのか？ 俺は怒りで、一瞬恐怖をすっかり忘れ果てていた。

この江戸は、俺たちが創設した、大事な仮想現実である。絶対、許すべきではない！

俺は左右を眺めた。どちらへ向かうべきだろうか？

右の方向が奥深そうである。

通路を辿ると、二手に別れている。左の方向から、足音が聞こえてくる。

俺は緊張した。

と、同時に、明らかな敵の出現に気分が軽くなる。正体不明の脅威に比べれば、遙かにマシだ！

遂に敵が現れた。

どつしりとした身体つきの、大男だ。現代的な通路にまるで似合わない、山賊のような格好をしている。

何かの獣の毛皮を身につけ、腰には胴太貫のような、どでかい大刀をぶち込んでいる。顔には真つ黒な髭を生やし、頭は総髪にして、戦国時代のような茶筌髷をしている。

大男は俺を認め、ニツタリと笑いかけた。

「お前、誰？」

ぶつぶつと途切れるような、ぶつきら棒な言葉を発する。こいつ、馬鹿か？ 俺はそれでも、一応、返事をしてやった。

「お前こそ、誰だ？ ここは何をするところだ？」

大男の目が見開かれた。一瞬で表情に怒りが浮かぶ。
「お前、敵！ 殺す！」

知性の欠片も感じさせない、極端に言葉数を節約した話しかたである。多分、山賊属性の、NPCだろう。

俺は大男に向かって、一歩ぐいっと踏み出し、両目にあらん限りの力を込め、睨みつけた。

大男の表情に、微かな不安が浮かんだ。

「どけ！ 命が惜しければ、俺に手を出すな！」

俺が叫ぶと、大男はたじたとになった。思ったとおりだ！ こいつはNPCだ！ NPCは、俺のような現実世界の【遊客】には、本能的に恐怖を抱くのである。剣道の世界で言う「位負け」ってやつだ。

それでも大男の脳味噌は、救いようのないほどトロいらしい。大男はもぞもぞと手探りで腰の胴太貫に手を伸ばした。

自分が武器を持っている事実^{事実}に力を得たのか、唸り声を上げ、すらりと抜き放つ。

照明に、大男の刀身が玲瓏^{れいろう}とした光を放っている。柄にもなく、大男はいい刀を選んでいる。

大男は両腕で柄を掴み、じりじりと刀身を上げ、上段の構えを取る。ずっしりと腰が下り、全身から必殺の気合が放たれた。

大男の腕が完全に頭の上に持ち上げられ、わざとのように、胴がから空きになる。誘いの手だ。胴に打ち込めば、即座に腕が振り下るされ、俺の頭に刀が下りてくる。

俺は上体を心持ち前へ傾け、大男の顔から視線を逸らし、一点に集中しないようにして抜き打ちの構えを取った。手は大刀の柄に軽

く添えられているが、まだ抜かない。

大男は自信をぐらつかせたようだ。それでも俺の力量を見誤るという、どうしようもない過誤を犯す。

「うおーっ！」

大男の口から、通路一杯に響き渡るような、大声が上がった。が、俺は大男が口を開く寸前、叫び返していた。

「きえーいっ！」

俺の叫び声に、大男の構えがガタガタとなった。両腕が伸びきり、腰が引け、必殺の刀身から完全に力が抜け切る。

【遊客】のみが発する、裂帛れっぱくの気合だ。俺の気合に対抗できるNPは、金輪際、存在し得ない。

俺は身を低くし、大男の振り被る刀を楽々と躲かわし、手にした刀を一閃させた。

ぼくっ！ と、鈍い音が響き、大男は胴太貫を振り被った姿勢のまま、凝固していた。

「ぶふっ！ うぐうつ！」

大男の顔が、見る間に真っ赤に染まる。頬がぷーっ、と河豚提灯のように膨らみ、全身を海老のように屈める。

がちゃん、と派手な音を立て、大男の手から胴太貫が床に転がった。

俺の一刀が、大男の脇腹をまともに捉えていたのだ。恐らく、大男の肋骨の何本かが折れているだろう。

俺は手にした自分の刀身を、照明に翳かざしていた。大男に抜き打ちの構えを見せた理由は、俺の刀身を見せたくなかったからである。

なぜなら、俺の刀には刃がついていない。つまり、完全な鈍^{なまく}ら刀なのだ。

俺の方針として、NPCを殺すのは極力避けたい。そのため、刀には、わざと刃をつけない鈍ら刀を愛用している。もしも大男が俺の刀身を目にしたら、完全に俺を舐めて懸かるだろうと判断したのである。

しかし、いくら鈍ら刀とはいえ、全長数十センチの鉄の棒である。力を込めて殴り懸ければ、冗談事では済まない。

どた！ と、大男は横倒しになった。

俺は刀を鞘に収め、大男の歩いてきた方向へ歩みを進める。背後で、大男の苦痛に喘ぐ呻き声が聞こえてくるが、無視する。さらに下層へ通じる階段を見つけた。

俺は階段を下りて行った。

四

階段を下りる、俺の足取りは、自信に満ち溢れていた。

何と言っても、大男との対決が、俺に確固とした、自分の戦闘能力に対する信頼を取り戻してくれた。もう、躊躇^{ためら}いはない。

しかし階段を下りて、さらに地下通路を先へと進むと、俺の胸に、驚愕の感情が湧いてきた。

廃寺の地下室は思ったより広大で、規模は信じられないほど大きい。このような大規模な工事を、いつ始め、完成させたのだろうか？ 地下を掘り抜くだけで、大量の土や、泥が出たはずだ。コンクリートはどこから搬入したのか？ 天井に取り付けられている照明は、最新の設備だ。どれ一つ見ても、江戸で入手は不可能な材料ばかりである。

俺の胸に、じわじわと、ある確信が生まれてくる。

多分……いや、絶対、この地下室を作り上げた張本人は、現実世界の【遊客】の一人だ。しかも、プログラム優先アクセス権を持つ、上位のプログラマーだ。

工事や、建材の搬入など面倒な手続きは一切無視して、江戸の仮想現実プログラムに、廃寺の地下に地下施設を？上書き？させたのだろう。

これだけの工事だと、半年……いや、一年は優に掛かる。だが、？上書き？なら地下施設のデータをプログラムに書き込むだけで、一瞬でできあがる。

俺は、いつしか、齒軋^{はなは}りしている自分に気付いた。あまりの怒りに、自分がぎりぎりぎり奥歯を食い縛っているのも、気付かない

くらいだ。

何と言つ横暴！ 専横！ 無茶苦茶にも程がある！ 俺たち創設者のグループは、江戸を仮想現実に作り上げた後は、一切、プログラムの上書きのような、手出しは禁じている。

江戸に生きる人々の独立独歩を、俺たちは尊重している。江戸が仮想現実で存在を始めてからは、順調に発展を続け、俺たちの希望通り、江戸文化の華を咲かせていた。

どこのどいつが、俺たちの努力を踏みにじりやがったのか……！

いかん、いかん！ 冷静になるべきだ。

頭をぶるつと振って、顔をぺろりと手で撫で、俺は改めて、通路に注意を振り向けた。

通路の両側には、所々、ドアが取り付けられている。コンクリートの壁面同様、無愛想で、無機質な材質だ。ドアの一つに近づき、拳を使って叩くと、こんこんと固く、虚ろな音が響く。材質は鉄で、灰色の塗装を施されている。

思った通り、鍵が掛かっている。ドアには番号が振られている。番号は漢数字で、俺の目の前のドアには「十五」と墨痕も鮮やかに記されている。

ふむ？

俺は首を捻った。

近代的な地下施設に、ドアの漢数字は、どうにも不似合いだ。漢数字の筆跡は、くつきりと墨の色を見せている。もし、俺なら、このような施設を作り上げたら、ドアに記す数字はアラビア数字にす

るだろう。

奇妙な不一致。今までの、現実世界の【遊客】が関わっているという推測が、俄然、怪しくなってくる。

ばたばたと乱れた足音が聞こえてくる。足音は、俺の前方からだ。俺は、さっと周囲を見渡した。

隠れ場所は、どこにも見当たらない。そのつもりもない。俺はぐつと両足を踏ん張り、待ち受けた。

五

前方から数人の、薄汚い格好の、見るからにヤクザ者と判る男たちが駆けてくる。ヤクザ者は、俺を認めると、踏鞴たたらを踏んで立ち止まった。

「おおつ、と！ 誰でえ？ 検校様けんぎょうが、見て来いと仰ったが、どこから迷い込んできやがった馬の蠅はだあ？」

先頭の、何を考えているのか、女物の着物をだらしく着崩し、足下は雪駄を履いている細長い顔の男が、いがらっぽい大声を上げ、しげしげと俺の顔を眺めている。

こいつが一団の頭目と言うか、兄貴分けいぶんだろう。歌舞伎の「暫しばし」という演目で使われそうな、長さ一間ほどもありそうな、巨大な刀を肩に担いでいる。

他の連中は、口を利く知性も持ち合わせていないのか、先頭の男の背後で押し黙ったまま、陰険な視線で、俺を睨みつけている。どの顔を見ても、魯鈍ろどんそのもので、品性の卑しさが、姿勢から物腰から滲み出ている。連中も手に手に、様々な武器を持っている。

刀は元より、手槍、棍棒、大槌などなどで、これだけの種類があれば、兵具屋でも店開きできそうである。

検校様？ 男の口振りから、どうやらこの場所では、重要な人物らしい。

俺はニツタリと笑い返し、口を開いた。

「どいつもこいつも、酷い格好だな。まともな着物を手に入れる才覚すら、持ち合わせていないんだろ。それが格好良いと思っているんなら、救いようのない大間拔けばっかりだ！」

俺の舌刀に、連中の顔にさつと怒色が浮かんだ。俺の台詞を理解しているわけではなさそうだが、口調に含まれた嘲笑の響きだけは、確実に受け取っているらしい。

その通り、俺はこういつた連中を、心底から軽蔑している。いつの時代でも、どんな場所にも、ヤクザ、破落戸、与太者、愚連隊、ツツパリ、ヤンキー……。

薄暗がりのゴキブリのように、しつこく蔓延っている連中だ。どんな名前と呼ばれようと、どれほど世間に持て囃されようと、こいつらの本性は変わらない。人間の屑そのものだ！

「なにおう……！」

細長い顔のお兄いさんが、甲高い声で叫んだ。ぱくぱくと口を開いたり閉じたりしているのは、俺の挑発に、気の利いた返答が思い浮かばないからだろう。

俺は、ゆっくりと歩きながら、話し掛けた。

「この頃、江戸で悪党どもが鳴りを潜めているので、怪しいと思って色々と探りを入れたら、この上の廃寺に行き当たった。お前たち、未は獄門か、運が良くても、島流しの末路を辿るんだろうが、いたいここで、何を企んでいる？ さつさと白状すれば、俺が火付盗賊改の榊原源五郎配下の与力に話をつけて、刑の軽減ぐらいは掛け合ってもいいぜ。さあ、どうする？」

俺が喋っている間、連中は「なにおう」とか「ふざけやがって」とか「野郎」とか、色々口の中で呟く。だが、足は膠にかわに張り付いたように、その場で動けない。

もちろん、俺の【遊客】としての迫力が、連中を釘付けにしているのだ。時代劇で、ヒーローが、悪人の罪を並べ立てる際、敵役が

なぜか動かないままヒーローが喋り終わるのを不思議に思っていないだろうか？ 仮想現実の江戸では、当たり前なのだ。

「て……手前は誰だ！ 名前を言え！」

兄貴分の顔が、怒りの頂点に達したのか、赤黒さから逆に蒼白になった。

「問われて名乗るは、おこがましいが……知らざあ、言って聞かせやしよう……」

俺は気分が高揚していた。実に楽しい！

「姓は鞍家、名は二郎三郎！ 人呼んで？ 抜け参りの二郎三郎？！ どうだ、心当たりがあるかね？」

俺の名乗りには、連中は一斉に「ぎょっ！」とした顔つきになった。どうやら、全員、俺の名前に心当たりがありそうだ。キョトキョトと落ち着かなく、お互いの顔を見合って口を動かした。

「おら、知ってる……！ 辰兄いが、こいつのせいで、島流しの刑に遭ったって、聞いているぜ！」

「俺もだ！ 押し込みの親分が、何人も奴の手配りでお縄になったってえ、噂だ！」

「どんな場所にも、するりと入り込む、幽霊みたいな奴だって聞いたが……」

連中の顔に、はつきりと怯えの色が浮かんだ。俺の異名は、さんざん耳に胼胝が^{たじ}できるほど、聞かされているのだろっ。

先頭の細長い顔をした男が、ぶるぶると全身を震わせ、身内から高まる決意を堪えているような表情になると、ついに爆発したかのような叫び声を上げた。

「やっちまえ！ 生かして帰すな！」

やれやれ、全く型通りの台詞だ。

男の型に嵌まった叫び声は、それでも背後の連中を、背中から突き飛ばすように前へと押し出す力は一応あったようだ。

どどつ、と一斉に前へ飛び出し、俺を目掛けて殺到する。手にした武器を振り上げ、目を吊り上げて、必死の勢いだ。

俺は刀を抜かぬまま、軽くステップをして、奴らの攻撃をひよひよいと、寸前で躲し、側をすり抜ける際に、手刀や、拳で素早く当身を食らわす。さらに関節を逆に捻り、投げ飛ばす。おまけに蹴りを入れていた。

こんな連中に、武器を使うまでもない。俺の中に存在する、北辰一刀流の達人が、男たちを目にした瞬間、力量を計っていたのだ。

もちろん、現実の俺は、剣の達人でもないし、ヒーローでもない。仮想現実の江戸だけで通用する、無敵の超人なのだ。

俺が通りすぎた後に、通路の床に、奴らが呻き声を上げ、のた打ち回っていた。悶絶している何人かは、骨折しているだろう。

だが、俺は、良心に何の痛痒も憶えなかった。どんな悪事をしていたか知らないが、こんな場所で巢食っている限り、当然の罰である。

先頭の、兄貴分が取り残された。俺は、わざとこいつには手を出さなかった。あつという間に一人だけ残された男は、顔中から冷や汗をびっしりと浮かべ、呆然と立ち尽くしている。

相変わらず、馬鹿長い刀を肩に担いだままで、抜いていない。俺の早業に、抜くのをすっかり忘れていたのだろう。

俺はせせら笑ってやった。

「どうした？ お兄いさん！ まだ、やるかね？」

落ち着きなく、男は周りを見回す。勝ち目がないと判断したのか、表情が下卑たものに変わった。どうやら下手に出る気になっただけらしい。

「へへへへ……。鞍家二郎三郎さんとやら、お強いんで御座んすね……」

今にも揉み手をしそうな態度に豹変する。敵^{かな}わないと見たら、俺の足の裏でも躊躇いなく舐めそうな勢いだ。俺は嫌悪感を押し隠し、頷いてやった。

「さっきの、検校と言う名前は何だ？ お前たちの頭目なのか？ 企みは何だ？」

男は唇を忙しく舐めた。どう答えようかと、ありったけの知恵を結集しているようだ。

俺は奴をぐっと睨みつけ、厳しく詰問した。

「答える！」

男は全身が感電したかのように、大きく震えた。俺の気迫に触れ、一瞬ぼけつと痴呆のような表情を浮かべる。もう、こうなれば、俺の言いなりだ。

「お前たちの頭目に会わせろ！」

ぎく、しゃくと、男は棒を呑んだように身体を強張らせ、手足を突っ張った妙な姿勢で歩き出す。

「こ……、こちらで……」

案内を始める男の背後を、俺は歩き出す。

虎穴に入らずんば、虎子を得ず……。

ふと、そんな諺ことわざが頭に浮かぶ。

だが、俺の踏み込んだのは、虎穴どころか、竜の顎あぎとであるとは、思っても見なかったのだ。

六

ひよこひよこと、漂うような歩き方で、男は俺の目の前を案内していく。

通路を何度か曲がるうちに、照明は暗く、剣呑な雰囲気周囲に漂ってくる。壁は地下水が洩れているのか、じつとりと湿り、薄汚れた筋が、何本も斑模様を描いていた。

俺は背後から声を掛けた。

「おい、いつまで歩くつもりだ？」

ぴた！ と、男の足取りが止まった。ひよい、と振り向くと「ひひひひ……」と掠れた笑^{かす}い声を上げた。

不意に見せた男の変貌に、俺は立ち止まり、無言で睨みつけた。男はうつすら、頬に笑いを張り付かせたまま、横目で俺を睨んだ。厭な目付きだ。悪企みが、はつきりと目に出ている。

「おい……！」

一步、前に出ようとした瞬間、男はいきなり前方に弾かれたように跳躍した。出し抜けの変化に、俺は面食らっていた。

男の表情が「してやったり！」と言いたげなものに変わる。

「わあっ！」

俺は叫び声を上げていた。

男の姿が、目の前から消えうせる。突然の落下の感覚に、俺は完全に頭の中が空白になっていた。

反射神経のみが、俺を救っていた。

俺は空中で身を捻り、落下の衝撃に全身の筋肉を緊張させていた。足先が床に当たる感覚があつて、俺は膝を曲げ、着地していた。顔を上げると、ぼつかりと空いた天井の穴から、男が細長い顔を見せ、俺の姿を確認している。

「ちっ！ 無事だったか……」

舌打ちして、悔しそうな顔になる。

みすみす、罨に引っ掛かってしまったのだ！ 何と言う醜態！ 床は落とし穴になっていたとは、全然、これっぽっちも気付かなかった！

俺は素早く、自分の置かれた状況を見定めた。と言うより、どれほど酷い状況になっているのか、確かめたのだ。

三メートル四方ほどの、四角い箱型の穴に、俺は落ち込んでいた。上は跳ね蓋になっていて、男が通過した瞬間、俺をぱっくりと呑み込む仕掛けだった。

高さも同じくらいはあった。壁はつるつるの平面で、手懸り一つ、見当たらない。登るのは無理だ。

「どうした？ 鞍家二郎三郎ともあろうお人が、こんな間抜けな罨に掛かるとは、まったく、お笑い種だなあ！」

男は悪意たつぷりに俺に向かって嘲笑し、言い終わると仰け反つて笑い声を上げた。

「珍しい客人ですなあ……」

別の声が割り込み、俺を覗き込んでいた男は、ぎくりと身を強張らせる。

新しい声の口調は、ビロードのように滑らかで、抑制の効いた、

知性を感じさせるものだった。俺を覗き込んでいる男とは、格段の違いを感じる。

「検校様！ 鞍家二郎三郎とかいう、お節介野郎を捕まえましたが！俺が誘い込んでやったんだ！」
「判っておる……」

新たな声は、五月蠅うるはそうに、男の説明を一蹴した。男は叱られた子供のような表情を見せて、項垂うづなれた。

そうか、この声が【検校様】とか呼ばれている、陰謀団の頭目なのだ！俺は、声を張り上げた。

「検校とか言うのは、お前か？ここは何をする場所だ？企みは何だ？」

——ほっほっほ……。

検校は、さして可笑しくもなさそうな笑い声を上げた。

「お主の名前は、ちよくちよく耳にする。現実世界のヒーロー気取りの、お調子者だ。江戸で小悪党を相手にしていれば良かったものを、わざわざこんな所まで飛び込むとは、身の程知らずも極まったな！」

検校の台詞に、俺は眉を顰ひそめた。

「ヒーロー気取り」とは、江戸のNPCの発想ではない。明らかに、現実世界の【遊客】の口振りだ。

が、そうとも言い切れない。検校の口調には、はっきりと江戸NPC町人の口調が木霊している。

さらに謎は深まった。

考え込んでいる俺に、検校は話し掛けた。

「儂の正体に思いを馳せているのであろうな……。知りたいか、儂の正体を？」

「ああ、お前さんが、教えてくれるなら
俺は頷いてやった。」

「儂は【暗闇検校】と自称している。なぜ、このような異名を自称しているのか、判るかね？」

「さっぱりだな。俺は、謎解きが苦手だね。検校とは、江戸で、ピーッ！」

俺の言葉は、途中で警告音で遮られた。おえん俺は思わず口に出そうになった罵り言葉を押し殺す。

仮想現実では、身体的、あるいは精神的欠陥がある人間を貶めるおとしような言葉は制限されている。言葉に発した瞬間、警告音が鳴り響く仕掛けになっている。俺は唇を舐め、言い換えた。

「……目が不自由な連中が就ける地位の最高位だ。それを自称するとは、あんたは、目が見えない不幸を背負っているのか？」

相手は、微かな溜息を吐いていた。

「いいや、儂は、ちゃんと目も見えるし、耳も達者だ。しかし、儂は見えていて、見ていない。聞こえているが、聞いてはいない。つまり、本物ではない。そこでお前さんを覗き込んでいる男と、同じだよ」

検校の説明に、俺の頭の中に天啓が閃いた！ まさか、検校の正体とは……！

「さて、お喋りもお終いにしよう。お前さんと話せて、楽しかった

よ……」

検校の口調が、急に平板なものに変わった。もう、俺に関しては、興味の一欠片もないという口調だ。

俄かな不安に、俺は叫んでいた。

「おい！ 俺を、どうするつもりだ？」

「死んで貰う。ここまで忍び込まれるとは、俺も不覚だった。今は大事な時期なので……お前さんに邪魔されたくない……」

検校が言い終わると、一瞬にして、俺を呑みこんだ撥ね上げ蓋が戻った。落とし穴を闇に包む。俺は、完全な暗闇に閉じ込められた。

どうするつもりだ……？

俺は唇を噛みしめ、闇の中で立ち尽くしていた。闇の中で、俺の耳が微かな変化を捉えていた。

ちやぶちやぶちやぶ……。

水音だ！

やがて水音は、はっきりとした轟音となつて、俺を呑み込んだ暗闇に響いていた。気がつく、足下に冷たい水を感じていた。

水責めだ！ 検校の奴、俺を溺れさせるつもりなのだ！

逃げなくては……。

俺は必死になって、周りの壁を手探りしていた。

明かりのあった時に確認していた通り、何の手懸りもない。手は、
すべすべした表面を虚しく撫でるだけだった。

七

水責めだ！ 検校の奴、俺を溺れさせるつもりなのだ！

逃げなくては……。

俺は必死になって、周りの壁を手探りしていた。

明かりのあつた時に確認していた通り、何の手懸りもない。手は、すべすべした表面を虚しく撫でるだけだった。

水は、すでに俺の胸まで達している！

が、俺には最後の手段があつた！

俺は目を閉じ、暗闇で、ある暗号を思い浮かべた。緊急脱出のため、暗証である。

俺の視界に、仮想現実接続装置の、ウィンドウが開く。ウィンドウに「仮想現実の接続を切断して、現実に目覚めますか？」と表示が浮かび、「はい」「いいえ」の選択肢が出現する。

俺は、にんまりと、闇の中で笑いを浮かべた。

これがあるため、俺は江戸で？ 抜け参りの二郎三郎？ という称号を得ているのだ。どんな危急に直面しても、俺は悠々と仮想現実から逃げ出し、現実に目覚める特技を持つ。

俺は選択肢の「はい」を選んだ。ところが……。

何も起きない！

相変わらず、俺は落とし穴に閉じ込められたまま、押し寄せる水に、全身を浸している。もう、水面は首まで達している！

——はっはっは……！

検校の高笑いが、闇に響いていた。

「今、お前さんは、仮想現実の接続を断ち、目覚めようとしていたな？ 無理無理！ 廃寺の地下は、結界になっておる。あんたたち【遊客】が、出現するのも、脱出するのも不可能なのだ！ お前さんは死ぬのだ！ この地下でな……！」

水面は口許まで達していた。俺は必死になって水面をばちやばちやと掻き分け、立ち泳ぎを続けていた。

いずれ、水面が上がって、俺の頭は、撥ね上げ蓋に着くだろう。その後は、上がってくる水面に、完全に没してしまい、溺れるだけだ。俺は途切れ途切れに、検校に向かって叫んでいた。

「俺を殺しても……無駄だぞ！ 俺の本体は……、現実で眠っているだけだ……。今、俺が死ねば……、本体は……現実で目覚め、また同じ対決の繰り返しになる……」

検校は物憂げな返事をした。

「左様……。確かに、お前さんは、五体無事で目覚めるだろう。が、ここ数日間の、江戸での記憶は失われる。確かにあんたは、自分が江戸で死んだのは判る。しかし、理由までは判らないだろう。再び、儼の目の前に現れるまでは、時間の余裕が生まれるのでね。ま、それまで、気長に待たせ。あんたが又そろ、のこのこ間抜け面を下げてくるのをね」

最後の部分は、もうはつきりとは聞き取れなくなっていた。すでに水面は、落とし穴のほとんどを占め、俺の身体は、水中にぶかぶかと漂っているだけだ。

微かな空間に、俺は必死に鼻を突き出し、最後の足掻きに、酸素の残滓を、貪るように吸い込んでいた。

がばり……と、完全に水中に俺の身体は没していた。もう、一息の空気すら、存在しない。俺は、ぐっと息を堪え、蓋の裏側をがりがりと爪先で抉っていた。

頭が、がんがんと割れるように痛んだ。肺が酸素を求め、爆発するように膨らんでいる。ごごおと耳の中で、血液が轟いているのを感じて、遂に俺は水中で口を開いていた。

どつと俺の口に、水が溢れ、肺に冷たい水が、わつとばかりに侵入した。

意識が遠ざかり、なぜか俺の耳に、検校の大笑いが木霊していた。

俺は、死んだ。

出し抜けに「あなたの死体が発見されました。大変、お気の毒に思います」と通達されたら、どんな気分だ？

俺は性質たちの悪い冗談か、と一瞬ちらつと考えた。

が、仮想現実接続装置のディスプレイ越しに、俺を見返している江戸入府管理事務所——通称？関所？の役人の大真面目な顔付きを見ているうち、冗談事ではないと不意に思い当たったのである。

「俺の死体、かね？」

問い返すと、関所の担当役人は、表情を変えず、静かに頷き返した。端正な顔立ちで、感情など完全に消し去った、人の顔の形をした機械のようだった。

頭の月代は綺麗に剃り上げ、丁髷はぴしりと真っ直ぐに一筋の乱れもなく、決まっている。身に着けている袴も、ぱりぱりに糊が利いているし、両方の肩口は、ディスプレイからはみ出しそうな勢いである。

「事情を聞かせてくれ」

俺は自分の部屋の中で、仮想現実接続装置の前に椅子を持ち出し、姿勢を楽しにした。

どうやら三日ほど、仮想現実にはたらく、俺の腹は空っぽになっていた。胃袋はすぐさま食物を摂取しないといけないと、五月蠅く抗議の声を上げていたが、俺は完全に無視して、役人の言葉を待った。

「明け六つ頃……ああ、失礼しました。午前四時頃……」

「江戸の時刻については、知っているよ。おれを誰だと思ってるんだ！」

俺は思わず、苛立たしく、役人の言葉を遮った。役人の顔に、初めて感情らしきものが表れ、頬を赤らめる。が、すぐ立ち直り、淡々と報告を続けた。

「見つけたのは漁師です。朝方、金杉橋から漁に出た漁師が、網を引き上げると、死体が引っ掛かっていたのを見つけて、すぐ役人に報せたという次第で……。身に着けている着物の柄から、あなたの死体だと判りました。検死の結果、溺死という結論が出ました」

俺は呆然と呟いた。

「土左衛門か……。死体は酷い状態だったろうな。見つけたのは金杉橋の側だったのか」

役人は小さく頭を振った。

「いえ、少し沖に出た場所でした」

俺は頭の中に、江戸の地図を思い浮かべた。

「金杉橋から少し沖合いとなると、潮目はどうなっている？　こうつ……と。死んだのは品川あたりか……？」

俺は思わず「殺された」と言いかけ、慌てて「死んだのは」と言い直す。まだ、殺人と決まったわけではない。

役人は軽く頷く。

「左様ですな……。漁師の証言から、その時刻には、潮目は品川から流れてくると申しておりましたから、大体、その辺でしょう」

言葉を切り、目を光らせた。

「いかがいたします？　すぐ、こちらへお出ましになれますか？」俺は思い切り顰め面を作っていた。

「そうしたいが、駄目だ。知っているだろう？　強制切断が起きた

後は、まる一日、そちらへ行けないのは」

役人の顔に、初めて気の毒そうな表情が浮かぶ。関所の役人および、江戸の行政、治安を担当する役人には、俺たち現実世界の【遊客】について、細かな事情を承知している者が多い。そうでないと、俺たち【遊客】が、江戸で面倒事に巻き込まれた際、きちんと対応できないからだ。

仮想現実が普及して、様々な問題が浮き上がってきた。現実から逃げ出し、仮想現実接続しっぱなしの、プレイヤー……【遊客】が問題になったのである。それを防ぐため、ある一定時間、接続を続けると、強制的に切断される安全装置が組み込まれた。強制切断がなされると、再接続するには、丸一日、休養を取らないと利用できない。

「そうでしたな……。それに、あなたが江戸に入府する時、再登録も必要でしょう?」

役人の指摘に、俺はすっかり再登録が必要なのを忘れていたのを、気付かされた。

「そうだ! 俺は…….と云うか、俺の仮想人格は……江戸で死体になっっているのだ。だから、俺が再び江戸に入るには、新しい仮想人格で、再登録しないと、仮想現実を受け付けてくれない。」

江戸入府…….本来は入国と言っべきなのだろうが、なぜかこちらの用法が罷り通っている。まあ、俺たち【遊客】は、江戸ではある種、特権階級と見做されているから、そう大袈裟とは言えないかもしれない。

俺は素知らぬ顔を作り、相槌を打ってやった。

「そうだな……。仮想人格再登録の手間もあるから、そちらへ向かうのは、明日になる……。詳しい事情を知りたいから、人数を集めておいてくれないか?」

役人は「お待ちしております」と頭を下げ、接続を断った。

思いがけない通達に、俺は何も映っていないディスプレイを見詰
め、腕を組んだ。

翌日、俺は仮想現実接続装置を使い、江戸へと舞い戻った。新たに仮想人格をデザインする手間を惜しみ、以前とまったく同じ外観を選ぶ。

現実世界と同じ、身長百七十センチ、体重は五十五キロと、痩せ型の身体に、身に着ける着物は、黒地に、伊呂波いろは四十八文字が、大きく白く抜かれて一面に描かれているという着流しだ。この着物のせいで、俺は江戸では「伊呂波の旦那」と渾名あだなされている。

頭髪の月代は剃らず、丁髷を乗せた浪人姿である。

俺が最初に向かったのは、仮想現実の江戸での玄関口である小仏関所である。江戸には幾つかの関所があつて、俺のような現実世界の【遊客】は、まずここを通過して、登録を受けなければならない。仮想現実に移移すると、最初に目に飛び込んでくるのは、どっしりとした外観の、関所の正門だ。俺の前には、すでに江戸に入ろうと登録を待っている【遊客】の、長い列ができていた。

いるいる……！ 若いのや、そうでない者、男女取り混ぜて、十数人が列を作っている。

押しなべて、皆、ど派手な他人目を引く格好をしている。

雲水の格好をしているのに、着物の地は、目にも鮮やかな真紅の衣の逞しい坊主。

列の中頃には、巨大な刀を背中に斜めに差している奴がいる。刀の柄は、右肩から突き出ている。あれで、いざと言うとき、抜けるのかね？

まっ昼間と言うのに、手拭を顔に垂らした夜鷹の姿をした女。あ

んな格好で江戸に入ったら、どんな目に遭っても知らないぜ！

俺は列の最後に並んだ。並ぶとすぐ、背後から「ぱたぱた」という駆け足が聞こえる。首を捻じ曲げ、そちらを見ると、一人の女の子が息を切らして走ってくる。

女の子の衣装は、多分、忍者のつもりらしい。時代劇で見えるような忍びの格好だが、まっ黄色の目がチカチカするような色合いの上着に、太股も顕わなセクシーさだ。髪の毛はポニー・テールにしている、鉢巻をしている。背中には短い刀を差し、手甲脚絆というお決まりの姿である。これで忍者と主張するのだから、お笑いだ。

俺は思わず、忍び笑いを洩らしていた。

女の子は、俺の笑い声に、きりつとした鋭い目で睨みつける。小さなめの顔に、吃驚するほど大きな瞳をしている。瞳の色は、微かに茶色がかって、折からの日差しに、一瞬きらつと金色に輝いた。

「何が可笑しいの？」

女の子は、俺が飛び上がるほど大きな声で叫んだ。喧嘩腰である。叫び声に、他の【遊客】たちが「何事？」とばかりに、興味津々の表情を浮かべ、こちらを振り返った。

俺は決まりが悪くなる。

「いや……、気を悪くしたなら謝る」

両手を曖昧に上げる俺に、女忍者は追及の手を緩めない。

「だから、なぜ笑ったのか聞かせて！ 訳を聞くまで許さないわよ！」

やれやれ、飛んだのに捕まっちゃった。

「君、江戸は初めてか？」
「そうよ！ 悪い？」

女の子は、挑発的に顎を上げた。背はそう高くなく、俺の顎にや
つと届くくらいだ。

「その格好からすると、忍者志望かな？」
「当ったり前じゃん！？くノ一？つて、知らないの？」

今度は俺は堪えきれず「ぷーっ！」と、思い切り吹き出してしま
った。女忍者は益々いきり立った。

「く……くノ一……だって！ 女が忍者になんて、そんなの、いる
ものか！」

女忍者の顔に、やや躊躇^{ためらい}いの色が浮かぶ。俺の反応に、自信がな
くなったらしい。

「だって……あたし、見たもん！ 時代劇で女の忍者は？くノ一？
つて、呼ばれているんでしょう？」

「あんな……」

俺は笑いを引っ込め、真面目な顔を作る。

「？くノ一？というのは、忍者同士の隠語だ。女という漢字を、分
解すると？くノ一？となる。それから来ているが、本来の意味は、
城に忍び込む際、内部の女を道具にするからなんだ。あくまで忍者
の道具の一つとして言われているんだ。歴史上、忍者になった女は
いない」

「そ……そ、そうなの？」

女忍者の視線が、落ち着きなく、キョトキョトと彷徨^{さまよ}った。

俺は女の子の衣装を指さした。

「それに、その格好！ 十キロ……いや、こちらの言い方なら十里

先からでも目立つ格好だぜ！ 他人目^{ひと}を避けなければならない、忍者が、それじゃ、チンドン屋だ！」

女忍者は、これには参ったようだ。だが、俺の着流しを見て、皮肉な笑みを浮かべる。

「あんただって、似たような格好じゃないの。他の皆からすれば大人しいけど、随分と目立つ柄よねえ」

「うん。俺は江戸では？伊呂波の旦那？って渾名されている。身分は浪人だから、大目に見るさ！」

俺はそれきり会話を打ち切り、懷手をしてほりほりと顎を掻いた。女忍者に背を向け、登録を待つ。

三

関所の大門を潜ると、間口九メートル、奥行き五メートル半の面番所があつて、正面に関所の責任者である番頭が正座している。奥には横目付けと呼ばれる役人が、床机しよづきを出して、帳面に勿体ぶつた顔付きで何やら記入している。

番頭は実直そのものといった顔付きで、糞面白くもない関所の業務を、無表情で勤めている。二十俵二人扶持だから、薄給である。

まあ、近郷の苗字帯刀の老百姓が採用されているわけで、百姓のほうか本業だから、薄給でも構わないわけだが。

身につける着物は、当人も百姓の本分を弁えて、木綿の質素なものばかりだ。

「これ！ 女は、あちらじゃ！」

足軽——関所の雑用係が、俺の後ろから面番所に向かおうとする女忍者を呼び止めた。女忍者は、訳が分からず、きよとした表情である。俺は耳打ちした。

「男女別々になるんだ。あっちでは人見女ひしめつてのが待ってるからな」
「ああ、そう！」

女忍者は、明らかに気分を害した様子だ。

俺はニヤニヤ笑つて、黙っていた。男女同権は、江戸では未だ未解決の大問題である。俺たち創設者のメンバーでも、女尊男卑の風潮——男尊女卑の間違いではない。実は江戸時代、江戸は女性のほうが権利が高かった。何しろ江戸の町人の男女比率は、女性が少なく（幕末ではやや同数に近づいたが）女は貴重で、守られていた。男女が結婚する際、離婚する時の保証金を明確にした契約書を交わ

したほどである——をどうにかすべきだという意見があるのだが、結論は出ていない。

実質的に、江戸では男女同権であるが、こうした形式的な場面では、古くからの慣習が顔を出す。

女忍者は、ぷりぷりと怒りを押し殺し、女専用の改め所へと案内されて行った。女忍者は、自分が差別されていると誤解しているのだ。

見送った俺は、ゆっくりと、関所の配置を眺める。

面番所の周囲には、高さ二メートルほどの木柵が巡らされ、高札が立っている。高札には、これから江戸へ入る際の注意点が、俺たち【遊客】たちにも分かるよう、楷書体で列挙されていた。もっとも、誰も読む者はいないが。

面番所の屋根の向こうに、富士山の偉容が遥かに聳えている。

もちろん、本物の富士山と、まったく同じ高さで、頂きには僅かに雪が残っていた。この景色が【遊客】に「江戸に来たんだ!」と実感させる。

関所を通過するため、【遊客】が一人一人、番頭の前に進み出ると、番士が書見台のようなものを前にして、時々触筆タッチ・ペンで操作している。

書見台は、実は走査器だ。スキャナー【遊客】が前に進み出ると、走査器が

【遊客】のデータを瞬時に走査し、書見台そっくりのディスプレイに表示するのだ。御禁制の所持品を探している。問題がなければ、入府が許可され、次回からは江戸での所定の出現定点を利用できる。

「次の者! 出ませい!」

足輕の掛け声に、俺は、のっそりと前へ進み出た。

走査器を覗き込む、番士の顔がたちまち驚きに変わる。さつと番頭に伸び上がり、急いで耳打ちをした。番頭も仰け反るような格好になって、俺の顔をまじまじと見詰める。

「俺の名前は、鞍家二郎三郎。何か問題でも？」

番頭はありありと狼狽の色を顔に浮かべ、背後の定番人に上体を捻じ曲げた。

「これ！ 儼はこれより、鞍家殿と面談があるゆえ、そちは代人となつて、【遊客】たちの相手を致せ！」

早口で命令すると、あたふたと立ち上がる。定番人は、素直に平伏すると、番頭の代わりに面番所の正面に正座した。

俺は番頭の後に続き、面番所の建物に上がりこんだ。大小は右手に持ち替える。

奥に進むと、番頭勝手と呼ばれる小部屋に入る。さらに奥が台所で、床敷きの狭苦しい部屋に、俺と番頭は向かい合つて座つた。

番頭はゆつくりと胡坐あぐらの形になつた。板敷きでは、胡坐が正式である。俺は両足をだらしなく投げ出した。両手を背後に突いて、尻餅をついた格好である。

腰を降ろすと同時に、がらりと音を立て、大小を部屋の隅に投げ出した。

この大小というやつ、恐ろしく重い！ そりゃあ、当時の武士階級は、身分の象徴として腰にぶら下げるのも平気だつたらうが、俺は【遊客】だ。生まれながらの侍じゃない。

大小の代わりに、もっと手軽な武器はないだろうか、この時もあったが、妙案は浮かばない。当分、こいつに我慢するしかないのだらう。

向かい合った番頭は「へへーっ！」と全身に畏れを顕わにして平伏した。俺は手を振って、相手の畏まりを止めた。

「よせよ！ 堅苦しい真似は、苦手だ」

「しかれど、鞍家様は江戸の開闢かいびやくお歴々のお一人で御座りますれば……。身供など、同席も憚る高貴なお方……。何しろ將軍様御目見という尊い御身分で御座りますぞ！」

「馬鹿馬鹿しい……」

俺は苦り切った。

確かに俺は江戸で、征夷大將軍——將軍に拝謁できる特権を持つ。將軍は、仮想現実の江戸を創設する中心プランナーで、俺たちは計画の細部を手伝ったに過ぎない。が、俺は江戸が完成した後も、一度も拝謁の特権を行使してはいない。

何しろ將軍は、俺たちにとっても伝説の人物で、口さがない連中の中には、實在すら疑う奴もいる。

俺は番頭の気分をほぐすため、笑いかけた。

「俺は江戸では、ただの浪人。この着物のおかげで？伊呂波の旦那？って呼ばれている。そう、しゃち強張らなくてもいいぜ！」

「恐れ入り奉ります……」

降参だ！

俺は番頭の目を見据え、強引に話題を変えた。

「俺の身に何が起きたか、承知しているな？」

番頭はゆっくりと點頭した。

「関所には、江戸で起きた重大な事件は、すぐさま通報される決ま

りで御座りまする。鞍家様が、死体で発見されたという変事は、まったく驚き入り申す他は御座りませぬ」
「まったくだ」

俺は同意した。そりゃ、江戸で死体が発見されるのは珍しくはない。その死体が、俺のような【遊客】だったのが、珍しい……驚天動地の変事だ！……のだ。

「溺死だったそうだな。本当にそうなのか？」

番頭は、不審そうに、俺を見つめ返した。

「検使けんし与力による検分で御座りますれば……。報告によりますれば、肺のすべてに水が溜まっておったそうな。明らかに、溺死で御座ろう」

「なるほどな……」

俺は自分の考えを呟いていた。

「俺たち【遊客】が、江戸で死ぬのは、不思議じゃない。突然の事故で、旗本の馬に蹴られる、大八車に轢ひかれる、防火用水の天水桶が崩れて下敷きになるとか、厭な話だが、辻斬りに後ろからばっさりと斬られたとかなら、頷ける。しかし溺死だぜ！溺れ死ぬ前に、たつぷりと時間の余裕があったはずだ！その間に、非常脱出の、現実転移すらできないとは、信じられねえ。いったい、俺の身に何が起こしたんだ？」

番頭は気弱げな、沈黙を保った。百姓にして関所の役人に取り立てられるほどだから、仕事に対する熱意や、義務感是人並み以上だろつ。

だが、生憎、想像力は蠅の脳味噌ほども持ち合わせていないようだ。もとより、俺は番頭の返事など当てにはしていないが。

俺は大小を掴み、立ち上がった。

「埒もない考えはやめだ！俺はすぐ、江戸入りをする！おい、

猪牙舟を頼むぜ！
「畏まつて候！」

明確な俺の指示に、番頭の顔に初めて笑顔が浮かんだ。

四

猪牙舟^{ちよき}は、すらりと細長い船体をした、快速船である。江戸の遊び人が、吉原通いの時、船足の速い舟を求めたため、遊び人の専用と思われているが、もちろん、江戸だけで使用されたわけではない。舳^へ先が尖がり、それが猪の牙に似ているから猪牙と呼称した——一説では長吉という舟大工が工夫して、長吉舟から転訛した——なととされる。

艫^{とも}には船頭が俺を待っていた。がっしりとした身体つきで、両目が鋭い。

番頭と一緒に船着場に足を運ぶと、女忍者が先に舟に乗り込むところだった。女忍者は、俺の気配に顔を上げた。

「あら……あなた!」

「また会ったな」

俺は苦笑いを浮かべた。女忍者の後ろから舟に乗り込むと、見送りの番頭が棧橋で深々と頭を下げた。

「お気をつけ下さいませ」

番頭の丁寧な挨拶に、女忍者は首を傾げ、俺の顔を不思議そうに見詰めた。見るからに痩せ浪人姿の俺に、関所の責任者が慇懃^{いんきん}な物腰で見送るのが、奇妙なのだろう。

「あなた、誰？」

俺は肩を竦めた。

「見たとおりの、痩せ浪人だよ。前にも言ったが江戸では？伊呂波^{いろは}の旦那？で、通っている」

「舟を出しますので、しっかりと船端にお掴まりくだせえ」

船頭が唖れ声を上げる。きい——、と艫^ろを動かし、舟はゆらりと微かに水面を切り裂きながら離れていく。女忍者は、俺の追及を忘れ、船端にしがみついた。

ちらりと振り返ると、番頭が棧橋に立つたまま、深々と頭を下げたまま、俺を見送っていた。

たちまち関所の建物は背後に遠ざかり、俺と女忍者を乗せた猪牙舟は、小仏川を下っていく。

辺りは初夏の盛りで、岩肌には緑が萌え上がり、眩しい日差しが水面にきらきらと反射している。猪牙舟は、のったりとした船足で、川面を下っていく。

平穩無事を絵に描いたような景色だ。

小仏関所は、現実の地理で言うと、高尾山裾野から八王子に位置し、小仏川は浅川に通じて、多摩川に注ぎ込む。俺を運ぶ猪牙舟も同じルートを辿るが、現実の川筋とは、ちよいと違っている。何せ、江戸への最短ルートであるから……。

「おい！　しっかりと掴まっているよ！」

俺の前に座っていた女忍者は、問い掛けるように、こちらを振り向いた。俺は叱り付けた。

「口を閉じていろ！」

女忍者は、俺の命令口調にむっとした表情になった。

だが、俺の真剣な顔付きに、それでも慌てて前に向き直り、船端を掴んだ手に力を込めた。

「そうれ！」

船頭が声を張り上げ、艫を一杯に動かした。

途端に、舟は、弾かれたように前に飛び出した。

「きゃああああっ！」

女忍者の甲高い悲鳴が、辺りに響き渡る。俺は口をぎゅっと引き結び、次にやってくる衝撃に備えていた。

ざっぱあああん！

舟は空中に一瞬、ふわりと浮かび、次いで物凄い勢いで落下し、再び水面に着水する。

ずしんと尻の下から衝撃が突き上げ、真っ白い水飛沫が、両側から水のカーテンのように広がった。

川は滝となって雪崩落ちていた。そこを猪牙舟は真っ直ぐ突っ切り、落差のある水面を次々に越えていく。

もちろん、本当の小仏川がこのようであるはずもない。これは小仏関所から江戸へ最短で向かうための、ちよつとした修正なのだ。距離と、時間を短縮するため、位置エントロピーに手を加えている。本来は数十キロはあるつかという距離を、僅か数キロに短縮するため、数百メートルの大瀑布を一気に下ると同じなのだ。

川は急流に姿を変えていた！

どうどうと轟音が響き、真っ白な飛沫が辺りを霧に包んでいる。霧は途中の行程を隠すのに役立ち、たった十分ほどで江戸へ到着するという不自然さを感じさせないための工夫だ。

だが、初めて江戸へ向かう旅人にとっては、たった十分は、永遠にも思えるだろう！

揺さぶられ、撥ね上げられる。ざばんざばんと恐ろしい水音が周りを取り囲み、前後左右の区別すら曖昧になる。

水飛沫の隙間から、俺たちと同じ、江戸へ向かう別の猪牙舟の姿が垣間見える。乗客は、皆、俺と同じ【遊客】で、恐ろしい体験に目を一杯に見開き、息を詰めて、恐怖に耐えていた。

艫で艫を漕ぐ船頭は、舟がどんなに上下左右に揺すられても、まるつきり動ぜず、手にした艫を巧みに操っている。

視線を上げ、周りを見渡すと、辺りの風景はリニア・モーターカーの窓から見たように、猛速度で後ろに飛び去り、緑と灰色と、空の青さが、だんだんに溶け合っている。

前方からは強烈な風がまともに吹きつけ、目も開けていられない。もつとも、本来の速度なら、音速を超えているから、俺たちは舟にしがみつくなど、とうてい不可能だ。

きやあきやあと、女忍者は息を切らせず、悲鳴を上げ続けている。なんという、肺活量だ！

そのうち、悲鳴だか、歓声だか俺には区別がつかなくなった。

五

不意に舟は、穏やかな川面を滑っていた。
静寂が辺りを包み、女忍者は飽きずに悲鳴を上げ続けていた。

「もう、いい。終わった」

俺は背後から、女忍者の背中を突つついた。

「え？」

ぼんやりとした顔を挙げ、女忍者は目をパチクリとさせ、辺りを見回した。

すい、と空中を、燕が一羽、視界を斜めに切り裂き、矢のように飛んでいく。

「ここ、どこ？」

「多摩川だよ。現代の地名で言うと、大田区の外れに当たる。俺たちは、すでに江戸に入っているといって良い。川の左が大田区で、右が川崎市だ」

「嘘！ こんな田舎が、どうして……」

女忍者の疑問は、もつともだ。川縁に見える景色は、一面の田圃で、江戸と言われて思い浮かべる、家々が犇き、無数の人々が行き交う光景は、どこにも見当たらない。

現実世界なら、そろそろ多摩川大橋が見えてきて、国道一号線が通っている。都会のド真ん中とは言えないが、現実世界なら大小無数の建物がごちゃごちゃと立ち並んでいるはずだ。

田圃の向こう側には、所々に農家が散見され、江戸というより、どこかの農村といった風景である。田舎らしく、ぶん、と堆肥の匂

いが鼻腔を刺激する。

が、江戸は中心部でも、半分は農地であつた。十七世紀から十八世紀にかけ、江戸は人口百万を越え、世界有数——いや、世界最大の都会であつた。それでも、半分の土地は農地であり、同時に世界最大の農村でもあつたのである。

舟は、広大な敷地の屋敷が立ち並び、一画に入っていた。立ち並んでいるのは大名の下屋敷群だ。

一つ一つの屋敷の敷地は思い切り広々としていて、塀に囲まれた内側には庭園が設えられ、樹木が高々と盛り上がって、屋根を覆っている。森の中に、屋敷の屋根が沈んでいるように見える。

幕末から開化期にかけ、来日した外国人の手記を読むと、いかに当時の江戸に、樹木が多かつたかを記している。

ふと気がつくと、幾艘もの猪牙舟が、舳先を並べて棧橋に近づいていく。船客は、もちろん、【遊客】たちだ。皆、物珍しげに、初めて見る江戸の景色に、目を輝かせていた。

多摩川から、支流に入り、棧橋が見えてくる。

矢口の渡しだ。

渡しに近づくと、途端に雰囲気は猥雑なものに変わる。渡しの周りには、川縁に落ち込みそうなくらい近々と、幾棟もの建物が立ち並んでいるのが見えてくる。川に面した方向に、沢山の窓が開き、欄干には厚化粧の女が、鈴なりになって、こつちを見ている。

「【遊客】の旦那！ あちしと遊ばない？ たつぷり可愛がつてあげるよう！」

「一人だけじゃないよ、一遍に、二人、三人を相手にする気はない

かえ？」

「あちしを見ておくれ！ ほら、こーんなに旦那を待って、肌が熱くなっちまった！」

きやあきやあと、姦しく騒ぎ立てる。皆、必死に自分を売り込もうと、身を乗り出し、手を振っている。

品川宿は、まだ一里ほど先だが、こんな場所まで、史実と違って【遊客】を目当てに遊郭が立ち並んでいる。まっ昼間から、ここまですで娼妓たちの白粉の匂いが漂ってきそうだ。

女忍者は、娼妓たちのド迫力に、圧倒されていた。目が合った娼妓の一人は「ふん！」とばかりに、競争相手を見る目つきで、険悪な視線を送ってくる。女忍者は、明らかな憎悪の感情に、戸惑っているようだ。

何しろ、俺たち【遊客】は、江戸ではお大尽だ。

江戸に入府する際、俺たち【遊客】には、一人当たり切り餅二つ——つまり、百両、現代人の感覚なら一千万円もの多額の支度金が受給される。

その理由は、参観交代がないからである。

江戸は大消費地で、江戸にやってくる各藩の大名が、江戸で盛んに消費をした結果、人口が集まり、商業が栄えた。

大名が盛んに消費したのは、幕府の役人を饗応するためである。目的は一つ。幕府の「お手伝い」を免れるためである。

当時の幕府は、各藩の実力を削ぐ目的で、壮んに「お手伝い」を命じた。江戸城の修理、河川の整備、新田の開発……。それらは各藩の自腹で、幕府に命ぜられれば、拒否は不可能だ。

つまり、公共事業をどうか、我が藩に命じないで下さいと、幕府の役人に頼み込むために饗応したのである。現代と、まったく逆だ。

しかし、仮想現実の江戸では――。

江戸にいる大名は、定府の大名である。つまり参観交代の必要がない、松平姓を許されている譜代大名や、尾張、紀伊、水戸の御三家、田安、一橋、清水の御三卿。

老中（現代でいうなら国務大臣）や若年寄（国務副大臣）、側用人（官房長官）の他にも、寺社奉行（文部科学大臣）や勘定奉行（財務大臣兼最高検検事）、町奉行（警視總監兼消防總監兼東京都知事兼金融大臣）、大目付（東京地検特捜部長）などの重職を務め、大名に取り立てられた幕臣なども、含まれる。

幕臣以外でも、【遊客】の中には、物好きにも幕閣に参加する者もいて、それらも大名や大身旗本の身分を手に入れた。

もちろん、俺たち江戸創設メンバーも、その気になれば、大名や諸奉行として取り立てられる。

しかし、俺は一切、その気はない。こうして、浪人身分で自由を謳歌するのが、一番気に入っている。

随分と列挙したが、それでも本来の大名の数からすれば、百分の一だ。

これでは本来の消費都市として成立しない。そのため、俺たち【遊客】に不釣り合いなほどの金を持たせ、江戸で大名遊びをさせようという魂胆である。

矢口の渡しに到着した瞬間から、【遊客】には無数の誘惑が待っている。それに乗るのも一興、乗らぬもまた良し！

六

棧橋が近づいた。

船頭は手拭で汗を拭っている。小仏川で見た、鋭い目付きは今も欠片も見当たらず、のんびりとした眼差しになっている。

棧橋では、出迎えの町人が、手を振っている。口々に俺たちに向かい「宿はいかがです？ 若い飯盛り女がつかますぜ！」と叫んでいるのは、宿の客引きだ。

妙なのは、客引きが手に幟のぼりを持ち、打ち振っている。江戸時代にあんな客引きって、いたか？ 多分、俺たち【遊客】の入れ知恵だろう。

「御府内に一刻も着きたいなら、わっしらの早駕籠かこはどうでござ？」と、どんぶり腹掛けをした駕籠舁きらしき二人組が、駕籠を道端に置いて大声で呼び込みを続けている。俺たち【遊客】を当て込んで、客待ちだ。

駕籠には、白黒の市松模様の帯が縫いつけられている。けっ！ イエロー・キャブを気取っているのか？

女忍者が俺の顔を見上げ、尋ねてきた。

「飯盛り女って、何？ 飯を盛る女が、どうして、宿の売り物になるの？」

「さあな……」

俺は顎をこりこりと掻きながら、空惚けを決め込んだ。

女忍者は、俺の返答に何かを感じたのか、プイと横を向く。時代劇ファンだというのに、飯盛り女を知らないのか？

とん、と猪牙舟の舳先が棧橋に軽く突き当たり、舟は役割を果たした。

俺は、さっと着流しの裾を翻し、棧橋に飛び移った。俺の後を追いかけるように、女忍者が慌てて立ち上がった。

瞬間、バランスが崩れ、舟が大きく横揺れする。

「きゃあっ！」

「おーっと！」

俺は手を伸ばし、女忍者の腕を掴んで引き寄せる。【遊客】は、江戸では、抜群の反射神経と、底なしの体力を誇るのだが、仮想人格に慣れていないと、思わぬミスをする。

俺が助けていなければ、女忍者は確実に引っくり返り、水面に頭からざんぶと飛び込んでいた。

「あ、ありがとう……」

女忍者は、俺の腕に^{すが}縋ったまま、顔を赤らめた。俺は「こんな無様な動きで、女忍者になれるのかね？」と余計な心配をしてしまう。俺は女忍者の肩を、ぽんと叩き、街道を指差す。

「もう、江戸は目と鼻の先といって、いい。この先、品川宿から高輪の大木戸を潜れば、そこが江戸府内さ。じゃな！　ここでお別れだ。達者でやれよ！」

女忍者は、心細い表情を浮かべる。初めての江戸に、どう行動していいか判らないのだろう。

俺は助け舟を出してやった。

「お前さん、忍者になりたいんだろう？　江戸に来た初心者、【

遊客】専門の口入屋つてのが品川宿にもあるから、相談してみな。

お前さんに向いた、奉公先を案内してくれるぜ」

「あ、あんたは、どうすんの？」

俺は眉を上げた。

「俺はこれから、元の棲家に戻る。そうだ！俺に会いたくなったら大木戸を潜つて、成覚寺側の？のたくり長屋？つて場所を訪ねれば良い。？伊呂波の旦那？つて言えば、すぐ判る」

女忍者は、目を光らせた。

「あんたの名前を教えてよ。まだ、渾名しか教えてもらっていないもん！」

「そうだったかな？」

俺は頭を掻いた。つい、目の前の女忍者を、昔からの知己のように思ってしまった。

「俺の名前は、鞍家二郎三郎。お前さんは？」

女忍者は、初めてにつこりと笑った。笑うと、笑窪ができる。

「あたし、晶あき！苗字はなくて、ただの晶でいいわ！男の子みたいな、名前だなんて、言わないでね！」

おやおや、先回りされた。多分、最初に自己紹介するたびに「男の子みたいな名前だな」と言われ続けているのだ。

晶と名乗った女忍者のあどけない、といていい開けっ広げの笑顔に、俺は柄にもなく、親切心を出してしまった。

これが、間違いの元なのだが……。

「口入屋に、俺の名前を告げるが良い。お前さんの希望を叶えるよう、口入屋の親爺は、知恵を絞ってくれるはずだ」

晶が何か言い掛けたが、俺はくるりと背を向け、とっとと歩き出した。

もう、女忍者など、すっかり忘れている。頭の中には、死体となつた自分の謎について渦が巻くように疑問が後から後から湧いて出て、女忍者の行く末など、好奇心すら欠片も抱く余裕はなかった。

矢口の渡しから少し歩くと、海沿いに街道が南北に走っている。
東海道である。

【遊客】が最初に上陸する地点でもあり、【遊客】目当ての遊郭、
旅籠^{はたこ}、茶屋などが、街道沿いに、ずらりと立ち並んでいる。本来は
もつと北寄りの地点に立ち並んでいるはずだが、いつの間にか、こ
うなった。

歩き出すと、わっ、とばかりに、俺の周りに客引きが取り付き、
袖を引っ張り、抱きつき、通せんぼをして、何とか自分の店へ足を
向けて貰おうと、必死に掻き口説く。

「旦那、旦那！　うちへおいでなされ！　酒は灘の生一本！　肴^{さかな}は
たんとありますし、女もつきますぜ！　夜通し騒いで、パァーッと
騒ぎましょう！」

「何を言ってるんだい！　この旦那は、うちのお客だい！　さあさあ、
ボヤボヤしていると日が暮れちまう。うちは湯屋で御座い！　【遊客】
がたに特別に、湯女^{ゆな}の泡踊りとまいりましょうや！　知ってますぜ、
【遊客】の旦那がたは、泡まみれになって女と戯れる趣味が御座り
ましよう？」

「旦那は女が趣味じゃなさそうだ。こっちの陰間はいかがです？
前髪残した、艶っぱい美少年が、旦那をお待ちだ！」

俺は腹が立ってきて、思い切り叫んだ。

「うるせえっ！　俺は急いでいるんだ！　そこをどけえっ！」

俺の叫び声に、取り巻いた客引きは一斉に飛び退いた。全員、顔を真っ白にさせ、恐怖の表情を浮かべている。

【遊客】が心底むかつ腹を立てると、江戸のNPCには太刀打ちできない。？気？が物理的な圧力となって発散され、酷い場合、気の弱いNPCでは気絶すらさせる。

俺は、ふつと息を抜くと衣文を繕い、ゆっくりと歩き出した。客引きたちは、たじたとになって、もう、近づこうとはしない。

と、渡しの方向から別の【遊客】たちが、物珍しげな視線を周囲に当てながら、いかにもお上りさんらしい物腰で歩いてくる。

客引きは新たな獲物を見つけたとばかりに、さあつと勢いよく、そちらへ殺到する。たちまち起きる喧騒に、【遊客】たちは目を見開き、棒立ちになっていた。

見ていると、一人が客引きに手を引っ張られ、旅籠の入口に消えていった。一丁上がりである。

渡しの側では、女忍者——あき晶が心細そうに立ち尽くしている。

俺は強いて無視して背を向けた。これから晶が江戸でどんな羽目に陥るか、予想はつかないが、もう、俺には関わりのない人物である。顔を会わせる機会もなからうと、思っていた。が、もちろん、俺は大いに間違っていたのだが……。

早足になって、その場を立ち去った。

いつの間にか、日差しが傾いてきている。急がないと、高輪の大木戸が閉まる。

街道を北上すると、鈴ヶ森刑場が見えてくる。本物の江戸の歴史では、八百屋お七、丸橋忠弥、天一坊、鼠小僧次郎吉、平井権八、白木屋お駒が処刑された刑場であるが、仮想現実の江戸では一人たりとも処刑の実績はない。実は処刑については、複雑な事情があって、江戸の各処刑場——小塚原、大和田、板橋とともに四箇所にあ

るが、未だ処刑そのものは実施されていない。

理由は「仮想現実のNPCといえども、人権を尊重しなければならないという」人権委員会が存在するからだ。

どのような理由があれ、生身の人間を串刺し、はりつけ磔、火炙りなどの残酷な刑罰を施すのは許されないという勧告があつて、今は敲たたぎや、首から下を土に埋める晒し刑などが実施されている。晒し刑のときは、大勢見物人が出て、それは賑やかだ。

磔や、火炙りの刑罰に代わるのは、消去刑である。犯人の、存在そのものを、この仮想現実のデータから消去してしまうのだ。苦痛もなく、一滴の血も流れないが、死刑には変わらない。ある意味、人間の尊厳そのものを否定する、残酷な処刑と言える。

俺たち創設メンバーは、仮想現実の刑法は、現実の刑法と一緒にできないと交渉を続けているのだが、人権委員は頑として首を縦にはしない。

刑場の周りには、店は一軒も立ち並んでいない。江戸の町人は、刑場に対し、極めて強い恐怖心を抱いている。なぜなら、俺たちは刑場を設定するとき、NPCだけが感じる恐怖の結界を張り巡らせたのだ。この結界に近づくと、江戸の町人は、曰く言いがたい恐怖の感情に襲われる。実際に恐ろしい刑罰が実施されていないに関わらず、江戸の町人は、刑場に引つ張られるような羽目に陥るのは一生御免だと、心の底から感じているのだ。

俺は平気で、刑場の側を通り過ぎる。足取りは、駆け足に近い。

急ぎ足になると、俺は恐ろしいほどの速度で歩ける。疲れも知らず、脇目も振らず、ひたすら歩く。途中の旅人は、俺と行き逢うと、吃驚したように飛び退いた。俺の通過した後は、突風が舞っていたろっ。

ようやく、高輪の大木戸が見えてきた。

門は閉まっていなかった。

道路の両側に高々と石畳が築かれ、どっしりとした木製の門が聳えている。本来の歴史では、火災で何度も焼失しているが、江戸を創建するとき、わざわざ門を作っている。

初めて江戸に入る【遊客】たちの「大木戸って、どこに木戸があるの？」という素朴な質問に応える目的である。広重などの浮世絵などでも、江戸末期には石畳しか残っていないのだが、そこは方便だ。

大木戸の周りにも、茶屋が立ち並び、賑わいを見せている。こちらには【遊客】目当てというより、江戸の町人相手に、目を吊り上げた客引きの姿は見掛けない。

木戸を通りすぎるとき、気になる人物を見掛けた。

ほっそりとした細面の若い男で、女物の着物を身に纏って、肩には呆れるほど長大な刀を担いでいる。

あまりに長すぎ、背中に背負うのも、腰に佩くのも不可能だ。だから肩に担いでいるのだろうが、いかにも重そうである。

気になるのは、男の目付きだ。陰険で、いわゆる三白眼というやつで、何か魂胆がありそうである。

これは俺の偏見ではない。俺たち【遊客】は、自分に向けられた視線に悪意があれば、はつきりと見分けられる。一種の読心術であるが、テレパシーの類ではない。しかも曖昧さは微塵もなく、誤解もありえない。

あいつは俺に、何か含むものがありそうだ。

俺は、わざと視線を外し、素知らぬ顔を保ちつつ通りすぎた。

背後で、奴がゆつくりと歩き出す気配を感じる。じりじりと後頭部に、奴の憎悪を込めた視線を感じている。俺には奴の一挙手一投足が、くつきりと脳裏に浮かんでいた。

早速の手懸りが、向こうから、わざわざお出ましだ……。俺はニヤリと笑いを浮かべた。

大木戸を過ぎ、町内に入ると、家並みがごちゃごちゃと立ち並んでいて、小さな路地が迷路のように交錯してくる。夕暮れが近づき、家路を急ぐ町人が、急ぎ足で通りすぎる。皆、俺を見て、物珍しげに見送っていく。

俺は身長百七十センチであるから、江戸では一種の巨人である。

何しろ江戸時代は、日本人の平均身長が最も低かったとされ、男子で百五十センチ、女子で百四十五センチというから、俺から見ると、まるで子供のように見える。

背後から尾行する若い男にとっては、見失う失態などありえない、絶好の標的だろう。

俺は男の姿を見た瞬間、記憶フォルダーに映像を保存していた。仮想現実に接続している間は、電脳空間の記憶領域は、俺たち【遊客】にとっての手軽なデータ保存先である。

江戸で暗躍する、他の悪党のデータを参照する。

しかし男の姿は、検索データに引っ掛かつてはこなかった。つまり、新たな悪党の一人なのだろう。

江戸では一定の人数、悪党が出現する。江戸に入府する【遊客】の数と、江戸での町人たちの貯蓄率、幕府への好感度などを勘案し、コンピューターが自動でキャラクターを設定し、江戸へと送り出す仕組みだ。

知能、身体能力、特技など組み合わせ、容姿も設定され、同じ組み合わせの悪党は、二人と存在しない。

悪党は俺たち【遊客】に退治されるため、存在するのだ。

【遊客】の江戸入府の目的は、自分が時代劇のヒーロー（ヒロイン）

になりたいからだ。そのため【遊客】たちは、電腦空間ではずば抜けた体力、筋力、反射神経を誇る、武道の達人である。

俺自身、北辰一刀流の免許皆伝所持者の技能を、何の修練もなく、身につけている。

ひたひたと、若い男の足音がつかず離れず、追ってくる。あまり尾行の経験はなさそうである。明らかに素人だ。

江戸の町中の道は、曲がりくねり、ちよつと歩いただけで、折れ釘のような角がいたるところにある。意図的に曲がり角を作っているのだ。敵に攻め込まれた際、直線路を通って来られないように工夫している。

俺は誘い込むように、門前町へと足を向け、細い路地を素早く移動した。さつと足並みを速め、大股になる。

背後で「あつ！」と小さな喘ぎ声上がる。

俺が出し抜けに足取りを速めたので、焦ったのだ。たちまちばたばたと、見つともないほど慌しい足音になる。

俺は「くつく」と、小さく喉の奥で笑った。

誰だか知らないが、粗忽者そこつを絵に描いたようなお兄さんである。路地を抜けると、築地堀ついちへいが長々と続く、寺の裏側に出る。

俺は堀の屋根に手を掛け、一瞬にして自分の身体を投げ上げる。

【遊客】のみが出せる、爆発的な筋力が可能にする早業だ。

俺が屋根の上に潜んでいると、例の若い男が、泡を食って通りすぎる。

目の前に誰もいないので、呆然と立ち止まった。途方に暮れている。

俺は奴を逆に尾行し返してやろうと、待ち構えていた。が、男のあまりの阿呆面に、気を変えた。逆尾行なんて、手間を掛ける値打ちすらない。

俺は音もなく地面にひらりと着地し、大音声を上げた。

「誰を探しているんだね？」

男は棒立ちになり、ぎりぎりぎりど歯車が噛み合わされるような不自然な絡繰^{からくり}人形めいた動きで、やっと俺のほうへ身体を捻じ曲げた。

俺の顔を見て、蒼白になる。が、それでも精一杯の強がりを見せる。

「だ、誰も探しちやいねえ！」

俺がずい、と一歩前へ足を踏み出すと、途端に弱気になって、今にも脱兎のごとく逃げ出そうという構えを取る。

俺は一喝した。

「動くんじゃねえっ！」

びくつ、と男の動きが止まった。両目がぼかんと虚ろに見開かれ、俺の顔から視線を外せなくなった。

【遊客】の一喝は、こいつらには雷に撃たれたような効果を見せる。俺は視線だけで男を金縛りにさせ、さらにもう一歩、近づいた。

よろよろと、男は俺の迫力に撃たれ、力なく後じさった。

どん、と男の背中が、塀に密着した。もう、逃げられない。がらんと長大な刀が手から離れ、地面に落ちた。ぜいぜいと、男は酸欠状態のようになって喘いでいた。

三

「俺を探していたな？ 大木戸で待っていたんだろう？ お前の名前は！」

「べ…… 弁天丸！」

俺は、ちよつと笑った。弁天丸とは、あまりに粹がりすぎる通り名である。

「ほう……。その弁天丸のお兄さんが、なぜ、俺を見張っていた？俺が大木戸を通りすぎるのを、前もって知っていたとしか思えない見張りつぶりだな」

「し…… 知らねえ……。お前なんぞ、顔も知らない……。ただの、偶然だ……」

俺は全身の氣力を込め、詰問した。

「嘘を言つな！ 誰の命令で、俺を見張っていた？ お前を手先に使った、親玉の名前を吐け！」

弁天丸は、きいきいと掠れ声を上げ、がくがくと顔を左右に振る。「い、言えねえ……！ 言ったら、俺が殺される！ た、頼む、見逃してくれ！」

ふうむ、と俺は胸のうちに唸った。

普通、俺がこれほど氣迫カリスマを強めて迫れば、こんな男なら、べらべらとありつたけの秘密を吐露するはずなのだ。が、意外と奴は、俺に対し抵抗している。

弁天丸は、かなり強く、秘密を守るよう、指令を受けていると思

えた。そんな真似ができるのは、俺と同じ【遊客】しかない……。

突然の驚きに、俺は愕然となった。

では、俺を狙っているのは、【遊客】なのか？

江戸にやってくる【遊客】は、時代劇のヒーロー、ヒロインになりたくて、仮想現実に接続している。悪漢をばったばったとやっつける、胸のすくような活躍を夢見て、入府するのだ。

事実、仮想現実では、そんな子供じみた夢が、呆気なく叶えられる。

が、ごく稀に、時代劇の悪漢を演じてみたいという、現実世界の正体がヤクザか暴走族という【遊客】も存在する。もし俺の想像が当たっていたら、容易ならない敵だ！

俺は今度は、ありったけの気力を奮い、弁天丸を睨みつけた。

「おい！ 俺の目を見ろ！ そうだ、目を離すなよ……！」

弁天丸の両目が裂けんばかりに見開かれ、俺の命令で、ひたと視線が張り付いている。

俺は「かあーっ！」と喝を入れ、ぐつと指先を弁天丸の目に突き刺さんばかりに突き出した。

弁天丸の表情から、一切の感情が掻き消えた。瞬時に全身の力が抜け、くたりと両肩が下がる。

俺の催眠術に掛かったのだ。もう、奴は俺の意のままだ。おのれ
の意思が蒸発し、後には施術者である、俺の命令を白紙の状態で待ち受けている。

俺は、噛んで含めるように、ゆっくりと話し掛けた。

「今までの出来事は総て忘れろ！ いいか、お前は大本戸で何も見

なかった、聞かなかった。一日、大木戸で俺を見張っていたが、待ち惚けを食わされたんだ。そうだな？」

弁天丸は朦朧と頷く。

「俺は、何も見なかった、聞かなかった……。鞍家二郎三郎は、来なかった……」

「何？」

俺の頭に、かーつ、と血が昇る。

「俺の名前を知っているのか？ どこで俺の名前を知った？」

ぐらぐらと弁天丸の顔が揺れる。ばかりと開いた口から、たらーと涎が零れ落ちる。

「死んだはずなのに、鞍家二郎三郎は、生きていやがる……。こいつは、殺せねえのか？ いや、化け物か！ 俺は厭だって言ったんだが、【暗闇検校】様は許しちゃくれねえ……」

「【暗闇検校】？ 誰だ、そいつは？ 俺が死んだのを、どうして知っている？」

思わず、矢継ぎ早に質問を重ねるといふ、俺にしては珍しい失態を演じていた。

がくり、と弁天丸の顔が仰け反り、膝頭から力が抜け、ずるずると背中を塀に押し付けるようにして、その場に蹲る。

「おい！ 弁天丸！」

ばかり、と弁天丸は、仰向けになって、地面に横たわった。

俺は膝まづき、弁天丸の閉じた瞼を引き上げた。完全に裏返り、白目になっていた。

しまった！

俺は臍^{ほそ}を嚙んだ。

秘密を吐かせようと、つい、焦ってしまった。俺の脅迫と、【闇閤検校】とかいう謎の黒幕による命令に板挟みになり、弁天丸の乏しい精神のヒューズが焼け切れたのだ。

俺は弁天丸の身体を抱え上げ、肩に担ぎ上げた。そのまま目の前の寺の塀に、ひょいと投げ入れる。

次いで、弁天丸が取り落とした、馬鹿みたいに長い刀を放り投げる。

いずれ弁天丸は、時間が経てば意識を取り戻すだろう。その時には、俺の記憶は、ぽっかりと脳味噌から抜け落ちている。しばらく、泳がせておくに限る。

【闇閤検校】か……。

多分、弁天丸の親玉だろう。だが、なぜ俺が検校と名乗る存在から狙われなければならないか、さっぱり見当がつかなかった。が、これでも一歩前進には違いない。

待っているよ……！

俺は、まだ見ぬ敵に、闘志を燃やしていた。

四

俺の棲家は、浄土宗の成覚寺じょうかくじ近くにある通称？のたくり長屋？の一画である。同じ名前の寺が、内藤新宿にもあつて、こちらは飯盛り女の投げ込み寺として有名だ。現実の世界では、第一京浜から少し西側に寄った場所に、同じ名前の寺が存在している。

なんで？のたくり長屋？なんて通称なのか、理由は定かでない。恐らく、長屋に棲み付くのが独身の男ばかりで、夫婦者がほとんど居つかないからではないか、と思っている。

何しろ、品川遊郭が、すぐ近くにあるのだ。夫婦者にとっては、いろいろ不都合な場面が多かるう。

江戸の若い男は——若い男に限らないが——、大半が独身者で、相手を見つけて夫婦になれるのは、本当に稀な例外である。何しろ江戸には、若い女性がひどく払底している。

江戸は、初期の頃から植民地のような発展を続けてきた。家康入府の際、家臣を引き連れ、江戸の地形を開削し、海を埋め立て、利根川の流路を換え、江戸城を作り上げ、嘗々と改造を加えてきた結果が、今の江戸だ。

勢い、集まるのは、職を求めて故郷から出てきた、男たちだ。少ない女を取り合い、相手を見つけられない男たちは、遊郭——むしろ岡場所のような手軽な売春宿に足を向ける結果になる。

俺の棲家の長屋は、いわゆる裏長屋で、時代劇に登場する、あれだ。ごみごみとした狭い路地を縫うように歩いていくと、まず目に飛び込んでくるのが、長屋の木戸である。

木戸の上には、長屋に住まう連中の、商売の看板というか、案内板が掲げてある。大工、植木屋、占い、細工師、飴屋——これは木戸番屋の爺いが、細々と商っている。

俺は「何でも相談承り」が一応の表看板で、知る人ぞ知るで、名前は掲げていない。

もっとも、【遊客】の俺は、最初からたつぷりと幕府から活動資金を支給されているから、商売などする必要もないのだが。

木戸を潜^{くぐ}つてすぐが、木戸番屋であるが、腰高障子は閉まっている。いつもなら、大きく開け放ち、商売物の飴が並んでいるのだが。

向かい合った長屋の中央にある溝板^{とび}を踏みしめながら、自分の棟に近づくと、辺りは、しんと静まり返っている。

前に夫婦者はいつかない、と説明したが、それでも木戸を潜^{くぐ}つてすぐの棟には、夫婦者が一組、住み着いていて、上に二人の女の子と、下に一人の男の子がいる。今頃の時間なら、手習い（江戸では寺子屋とは言わず、手習いである）から帰って、騒がしく遊んでいるはずだ。

妙だな、と俺は首を傾げながら長屋の中へと足を踏み入れる。俺の足下で、ごとごとと溝板が騒がしく鳴り響くと、からりと一軒の戸が開いて、細工師の松吉が顔を出す。

松吉は、居職の細工師で、根付などを作っているが、高価な材料である珊瑚や、象牙、水晶、金細工などはやっていない。主に柘植^{つげ}などを材料にしている。

細かい作業を長年してきたせいか、目が近い。俺のほうに顔を向け、目を細めた。作業中だったのか、前掛けを無意識に払って、細かい埃を叩^{はた}き落としている。

顔は四角く、背は俺の胸ほどしかなく、手足が細い。松吉はぼうつ、と俺の顔をしげしげと見詰めると、顔に驚愕の表情が弾けた。

「あ、あ、あ……！」

俺は一步踏み出し、声を掛けた。

「よう！ 松吉。とんと長屋が静まり返っているが、何かあったのかえ？」

松吉は震えながら腕を挙げ、俺を指さした。

「い、い、い……！」

「あ、あ、あ」と来て、次は「い、い、い」だ。今度は「う」と来るのかと思ったら、ようやく松吉は纏まった言葉を発した。

「伊呂波の旦那！」

「何だ、俺の顔を初めて見るような顔しやがって。俺に、用事でもあるのか？」

すとな、と松吉は、その場でへたり込んだ。青ざめた顔を持ち上げ、俺の顔をまじまじと見上げている。

「旦那……生きていなすったんで？」

「何いつ？」

「今朝、奉行所から報せがありやしたぜ。旦那が、金杉橋の近くで水死体で上がったと。それで、長屋の連中は、成覚寺に葬式を上げに出払ってますんで。あつしは、急ぎの仕事があつて、残ったんだ……」

「あつ！」と俺は思わず、自分の額をぴしゃりと手の平で叩いていた。

いけねえ！

俺の仮想人格は、江戸で死体になっていた。だから、今の俺は、長屋の連中には、死んだものと思われている。

俺は松吉に確かめた。

「成覚寺だな？」

松吉は、がくがくと震えながら頷いた。

さつと俺は身を翻し、ひるがえ大股で長屋を飛び出した。この始末をうまくつけないと、これから俺は、江戸で気楽な【遊客】として、暮らしてはいけない。

さあ、どうしたものか？

五

長屋からぐるりと回って、材木置き場を通り過ぎると、成覚寺の通用門に出る。成覚寺はそう規模の大きな寺ではないが、それでもちゃんと庫裏があつて、右横が本堂である。

本堂に近づくと、やってるやってる！ 読経の声が聞こえてきた。ぶん、と抹香まうこうの匂いが辺りに漂っている。

本堂には、長屋の連中がずらりと背を向け、神妙に和尚の読経に合わせ、気の利いた奴は、数珠など持ち出し、盛んに手を擦り合わせている。

お経を上げているのは、住職かいせんの界撰とかいう、何だか痒そうな戒名の坊主である。頭が大きく、汗掻きで、読経を上げている後頭部からびつしりと汗を噴き出させている。

俺は、わざと、朗らかな大声を上げた。

「誰か、のたくり長屋で死人が出たのかね？ 線香でも上げさせて貰おうか？」

全員、ぎよつとした表情で、一斉に振り返る。俺の顔を認め、皆まったく同じタイミングでばかりと大口を開けたのは、見物であった。

「ひえーっ！」

入口近くに座っていた、縫い物を請け負って生業にしている、おたね婆さんが年に似合わない甲高い悲鳴を上げて仰け反った。

「伊呂波の旦那だ！ 化けて出なすつた！」「どうか、迷わず、成仏しておくんなせえ……！」「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

口々に勝手な戯言を叫んでいる。

浄土宗の寺だというのに、何を血迷ったのか、「南無妙法蓮華経！」と声を張り上げている奴もいる。

もっと酷いのは、住職の界撰だ。なぜか界撰は、俺を見るなり、さつと右手の指先を額から両肩にやり、十字を切る仕草をする。多分、住職は隠れ切支丹なのだ。

本堂は、一瞬にして大騒ぎになった。

俺はニヤニヤ笑いを浮かべ、履物を脱ぐと、大股で本堂に上がりこんだ。

仏壇近く座り込んでいるのは、大家の要蔵だ。歳は六十近くだが、まだまだ元気で、肌艶も良い。

が、今の要蔵は、顔色を蒼白にして、俺を見るなり、ずりずりと尻を擦るようにして遠ざかる。

俺は大家に、たつぷりと顔を拝ませてから、座り込んだ。

「化けて出た訳じゃあ、ねえよ。ほれ、この通り、あんよもちゃんと二本あらあな」

要蔵は胡乱な目付きで、じろじろと俺の全身をとつくりと眺めた。さすが大家をやっているだけあって、一番先に冷静さを取り戻した。

「本当に、伊呂波の旦那で？ 生きていなさるんで？」

「悪いかね？」

問い返すと、ぶるつと顔を横に振った。

「と、とんでもねえ。しかし、あつしらは、ちゃんとして伊呂波の旦那の死体を見たんで……」

俺は頷いた。

「あれは、俺の兄貴だ。双子の兄が、実はいたんだ。上方で、剣の修行をしていたが、この度、江戸へ俺を訪ねに来ると、報せがあった。まさか来る早々、水死体になるとは思っても見なかったが……」

「双子の兄さん……！」

俺の言葉に、本堂の長屋の連中は、一斉に安堵の声を上げた。

長屋の連中以上に、俺は安堵していた。

何とか、うまく丸め込めそうだった。双子の兄とは、いかにもちぐはぐな言い訳だが、他に妙案はなかった。

ま、それでも俺には、【遊客】としての気迫がある。

俺はぐっと両目に力を入れ、長屋の全員の顔を、一人一人じっくり見据えた。俺の視線が注がれると、皆、ぽかんとした表情になって、俺の言葉を鵜呑みにする構えになった。

厄介なのは、本堂の隅に固まっている三人の子供だ。子供は素直な目で、物事を見るから、俺の苦しい言い訳を頭から信じるとは思えない。

が、子供の両親から「伊呂波の旦那は生きている。死んだのは双子の兄さんだ」と言い聞かせれば、何とかなるだろう。

「それじゃあ、兄のために、線香を上げさせてくれ。妙な具合になったが、俺が喪主で葬式の続きをやるうや！」

結局、そうだった。

やれやれ、ひと安心だ。

六

遺体を茶毘^{だび}に付し（仮想現実の江戸では、史実と異なり、火葬が一般的である）葬式が無事に終了し、俺たちは成覚寺からぞろぞろと、のたくり長屋へと帰っていった。

空を見上げると、とつぷりと暮れた空には、すでに星が一つ、二つ、瞬いている。俺は火葬した、もう一人の俺の骨を納めた骨壺を、白い布で包んで持っていた。

本来なら、これから通夜となるのだが、それは勘弁してもらった。代わりに、大家の要蔵に、いくばくかの金を握らせ「これで長屋の連中に酒でも振舞ってくれ」と頼むと、要蔵は心得顔で請合ってくれる。後は要蔵の、物の良く判った手配りが、長屋の隅々まで行き届くだろう。

いったい俺に、何があった？

思いは、つい、そちらに向かっている。あてもない、堂々巡りの思考が続く。

双子の兄とは、我ながらよく言ったものだ。俺は苦笑していた。ある意味、江戸で水死体になった俺と、今の俺は、双子と違っていい。まったく同じ経験、人生を送ってきて、もう一人の俺は、この江戸で死んだという違いはあるが。

やはり、殺されたのだろうか？ 俺を大木戸で待ち構えていた、弁天丸というヤクザ者の顔が脳裏に浮かぶ。奴が俺の問い詰めに、僅かに洩らした讒言のような言葉の切れ端から判断すると、それ以外には考えられない。

さて、自分の住処に落ち着こうと長屋の木戸を潜ると、出し抜け

に暗闇から、何かが俺を目掛けて突進する気配がする。

どどどどっ！ と、辺りに地響きを立て、何かが、いや、何者かが殺到する。

「伊呂波の旦那——っ！」

暗闇から、ぬっと、巨大な肉の固まりのような、巨体突き出した。

俺は思わず「うへっ！」と仰け反った。

ヤバイ！ 完全にヤバイ！ 俺は江戸で怖いものは一切ないはずだが、こいつだけは例外だ。絶対、暗闇でお目に掛かりたくはない相手だ！

「伊呂波の旦那！ 水死体になったなんて、信じられなかったけど、やっぱり元気だ！ あちし、嬉しいよお！」

どっしりとした上半身に、地面を踏みしめる大きな足。

懸命に駆けて来たのか、ぜえぜえと^{ふい}靴のような息を吐き、肩は大きく上下している。ぶん、と白粉の匂いが鼻を突く。

碁盤のような、真四角な巨大な顔に、目と鼻が鋭い^の鑿で線刻したように^{かんざし}についている。髪は芸者らしく、島田に、^{うが}笄や簪があちこち突き出している。

これでも、品川芸者である。

名前は吉弥。吉奴とも呼ぶ。

「旦那ーっ、心配したんだよお！」

猛牛の咆哮のような、辺りに響き渡る大声を上げた。吉弥の大声で、からからと瓦が数枚、屋根から滑り落ちる。

ぐわっ、と両腕を広げ、俺を抱き締めようと突進してくる。

「うわっ！」

俺は闘牛士のように、寸前で吉弥の突進をひらりと躲かわした。ずしんと吉弥の頭が、近くの板塀に突き刺さる。みしり……と音がして、数枚の板が押し折れる。

「旦那あ……」

顔中をぐしゃぐしゃにして、吉弥は巨大な顔面を持ち上げる。涙で、顔の白粉がだんだらになって、まるで……いや、完全に化粧物の泣き顔である。

折れた板の破片が、ぱらぱらと落ちていく。

「わ、判った……、な、落ち着け……落ち着けて！ な、いつもの笑い顔になってくれ。ほうれ、お客が誉めてくれる、あの顔だ！」

俺は両手を突き出して、懸命に宥なだめ役に回った。こいつには、俺の【遊客】としての気迫など、噴火口の一片の雪ほどにも、効果はない。

吉弥は俺に首っ丈なのだ。醜女しうめの深情けとは、よく言ったものだ！ どういうわけか、俺を見初め、いつかは俺の花嫁になると独り決めている。

ぐずん、ぐずんと鼻水を囓り上げ、吉弥はそれでも、にっこりと笑い顔になった。目が糸のように細くなり、頬にたつぷりと肉が盛り上がる。

なぜか、吉弥には鼻屑の胖子でい専系の客がついて、この珍妙な笑顔が可愛いと、煽て上げるのだ。吉弥は完全に、自分の笑顔に自信を持っていた。

俺は両手を広げ、我ながら嘘っぽい空気を振り絞って大声を上げた。

「な？　ちゃんと俺は、ぴんしゃんしているだろ！　もう、心配しなくても良いんだ！」

「うん」

こつくりと吉弥は頷いた。

ふいーっ、と今度は俺が大きく息を吐いた。まったく、今日という一日は、さんざんだった。最後の止めが、これである。

ふと、疑問が浮かぶ。

「ところで吉弥、何で俺が水死体になったのを、知ったんだ？　誰がお前に知らせた？」

吉弥はこつこつとした、グローブのような手を挙げ、道の彼方を指差した。

「あの旦那が――」

俺は吉弥の指差す方向に、目を向けた。

暗がり、一人の侍が立っている。

細身の大小を帯に捻じ込み、髪形は月代を細く剃って、小さな鬚を結っている。夏用の、縞の羽織を上掛け、袴を身につけている。侍の背後には、鉄箱を担いだ小者と、部下らしき同心姿の武士が従っている。部下の髪型は八丁堀髷とは違い、たぶさは小さめである。年齢は四十代初め頃か、どこといって特徴のない顔立ちをしているが、口許に深い皺を刻んでいた。

男はゆつくりと近づいてきた。慎重さを絵に描いたような足取りである。

「鞍家二郎三郎、じゃな？ 間違いなく」

俺は「へっ！」と嘲笑った。

「当たり前だろう？ 何年、俺と付き合っていると思う？」

侍は、それでも疑い深い視線で、俺の全身を嘗め回すように観察する。

「確かに見掛けは、儂の知っている鞍家二郎三郎その人である。が、奴は、水死体になったと町奉行から報せを受けた。何しろ、【遊客】の死体だ。検使与力が、わざわざ、儂の元へ報せに来たよ」

俺はわざと驚きの表情を作った。

「それで、確かめに来たのか？ 忙しいあんたが！」

源五郎は真面目臭った顔付きで首を振った。

「いいや、お役目でこちらに来る用があったので、ついでに足を運んだのじゃ。お主の顔を確認したら、すぐ役宅へ帰るつもりじゃった。しかし何か仔細がありそうじゃな？」

俺は、ぽん、と自分の胸を叩いた。

「安心しろ！ 戻って来たんだ。再登録したから、また、いつでも江戸で活躍できる」

それでもまだ、侍の疑いの視線は晴れない。俺は笑い出した。

「まったく、あんたと来たら、何でも疑って懸かるんだからなあ！ まあ、それが、あんたのお役目だから、仕方ないがね！ ところでこれからどうする？ 少し、あんたに話があるんだ」

「うむ」と、侍は、にこりともせず、頷いた。

男の正体は、火付盗賊改方頭。名前は、榊原源五郎である。身分は旗本、石高は三百石。家紋は百足。本来なら、俺のような痩せ浪人が直々に返答するなど恐れ多い。

先ほどから源五郎が「じやな」と口にするのは、これが旗本本来の喋り方である。決して老人じみた言い方ではない。もし部下の心が、同じような口振りになったら、無礼を咎められるだろう。

七

俺は、骨壺を納めた包みを長屋へ預けると、火付盗賊改方頭の榊ひつけとうぞくあらためかたかしら原源五郎、その部下、品川芸者の吉弥と連れ立ち、吉弥の案内で【瑞兆楼】ずいちようろうという由緒ある店へ出かけた。

本当は、もつと安直な店に行きたかったのだが、源五郎の体面と
いうのがあって、自由にはならない。

吉弥の案内した店は、いわゆる「一見の客はお断り」の類だ。俺
たちがぞろぞろと店口に姿を表すと、店の主人、女将が飛び出るよ
うに出迎えてくれた。吉弥がすでに話を通してあったと見える。

時刻は宵の五つ——午後七時頃——である。

史実では、暮れ六つには町木戸は閉まる決まりとなっている。だ
が、実際の江戸でも、午後十時近くまで開け放しになっていたらし
く、こちらでも、深夜まで夜更かしの町人は歩き回っている。

江戸では外食産業が、今と同じくらい盛んだった。何より独身者
が多かったせいもあり、住居環境も寝て、起きるだけの狭い棲家で
あり、わざわざ自炊するより、こちらのほうが安くつく。

俺たちの入った店は、食事も出すが酒も出す。が、その食事とは
要するに会席料理である。もちろん、料理の使い回しなどという不
届きなど、あるはずもない！俺たちが席につくと、お品書きが出
た。

俺が【遊客】なので、草書体ではなく、楷書体で書かれている。
しかし、俺には出される料理の名前は、まったく珍粉漢粉の戯言だ。
近ごろでは、【遊客】の注文に応じ、肉料理すら対応している。
もつとも豚、牛の肉を食うのは【遊客】だけで、江戸の町人は「薬
食い」として、あまり注文しない。

お通しと、酒がまず出て、榊原の部下の一人が一礼して一口含む。目だけ天井を睨み、暫し、じっとしている。部下は源五郎に向かい頷いて見せた。

なんと毒見をしているのだ！ 源五郎は、たまたま入ったこの店でさえ、信用していない。俺の視線に気付き、源五郎は苦笑した。

「儂の死に顔を見たいと切望する敵は多いからな。用心にしくはない」

源五郎の部下は、大人しく黙りこくっている。本来なら、俺のような正体不明の痩せ浪人が、対等の口を利く場面で、怒り出すのも不思議はないが、源五郎がよく薰陶していると見えて、一言も口を挟まない。

吉弥の前には、どつさりと料理が運ばれている。煮付け、刺身、大盛りの飯を無我夢中で、ぱくついている。吉弥には、高級な会席料理など、鯨が大口を開けたときに飛び込む、小海老ほどしか腹に応えないのだ。

俺は申し訳程度に、酒を飲み、源五郎に話し掛けた。源五郎は、俺が【遊客】であると承知しているので、このような対等の口を利く。

「どう思う？ 俺は殺されたのだろうか？」

「ふむ？」と、源五郎は眉を上げた。渋い表情になって、首を振った。

「判らぬな。水死体で上がったのは間違いないが、他殺と決め付けられる確たる証拠があるわけではない」

火付盗賊改とは、現代で言えば特別機動捜査隊に当たる。凶悪犯逮捕のため、大幅な権限が与えられ、町人だけでなく、武士、僧侶、神官なども捕縛できた。武士も浪人だけでなく、旗本、御家人にすら手が及ぶ。

しかも捜査範囲は、江戸だけでなく、全国に及んでいた。その点から見れば、FBIのようである。もっとも、俺たちは日本全国丸ごと再現したわけではなく、江戸が存在するために必要な範囲だけだ。それでも、かなりの広範囲である。

町奉行が基本的に文官であるのに対し、火付盗賊改は武官の番方から選出されるため、捜査手法は熾烈で、しばしば誤認逮捕の弊害も指摘された。

そのため、廃止されていた時期もあったが、やはり必要とされ、捜査には慎重を期すよう勧告されている。

源五郎が「他殺だ」と決め付けないのは、本来の性格もあるが、誤認捜査を恐れているのである。もし誤認捜査で冤罪えんざいなどという事態に陥れば、捜査の責任者は切腹、軽くて閉門、源五郎本人は遠島処分が待っている。とても軽々しくは、動けない。

俺は、顎に手をやった。

「判ってるさ。あんたは軽々に動けないってんだろう？　しかし、俺が嗅ぎ回るのは勝手だな？」

源五郎は表向きであろうが、顔を顰めて見せた。

「あまり、無茶をせんで貰いたいな。お主は、無鉄砲すぎる！　今回もそうだ。三日前、お主は僕に、江戸の悪党が妙な企みをしていると、言いに来た。それで、自分で動いてみると言い残して、水死体となったのじゃ」

俺は源五郎の言葉に、吃驚して見せた。

「俺が？ あんたに？」

「そうさ、憶えておらぬのか？」

源五郎の瞳に、またぞろ、疑い深い光が宿る。俺は首を竦め、手を振った。

「当たり前だ。仮想現実で強制切断されると、それまでの記憶は残らない。あんたも知っているはずだ」

「そうであつたな……」

源五郎は首を捻る。

この榊原源五郎は俺たちと違い、純然たる江戸のNPCだ。しかし、火付盗賊改方という職掌柄、俺たち【遊客】の事情については、詳しい。

俺は、弁天丸という若い男の名前を挙げた。

「弁天丸じゃと？」

もう一度、源五郎は首を捻る。

「聞いた名前ではないの。誰かの手下か？」

俺は首を振った。

「俺が締め上げると、検校という名前が出た。恐らく、そいつが黒幕だ」

「本当の検校なのか？」

源五郎は声を潜めた。俺は首を振った。

「判らん。ただの渾名あだかもしれない。しかし、確かめる必要はある」

源五郎は厭そうな表情になる。検校とは、江戸で目の不自由な人間の、最高位である。寺社奉行の管轄でもあり、面倒事を予感した

のだらう。

俺は源五郎を睨みつけた。

「どうする？　だんまりを決め込むのか？」

源五郎は、ぶるっ、と首を振る。微かに顔が赤らんだのは、怒りであろう。

「まさか！　俺が心配するのは、お主だ。また、水死体となってお目に掛かるのは、御免蒙る！　そうじゃ！」

不意に源五郎は明るい顔になった。

「お主に、相棒をつけよう！」

俺は驚いて鸚鵡返す。

「相棒！」

源五郎はニツタリと笑った。

「お主と同じ、【遊客】での。江戸で悪党を退治するため、俺の配下になりたいと申し出て来おった。それと、正式の与力をつける。

三人いれば文殊の知恵とか言うではないか。火盗改の与力となれば、お主も色々調べるのに都合が良い。どうじゃ？」

俺は顎を掻いて、源五郎の顔を見る。源五郎は無表情を装っているが、その目は笑っている。

「なあある……」

ほど、というのを省略する。

「あんた、その【遊客】を俺に押し付ける気だな？　与力がつくのは歓迎だが、その【遊客】は御免蒙りたいな」

わざとらしく、源五郎は腕を組んだ。

「二人揃ってじゃ！　条件は出した。いかが致す？」

「判ったよ……引き受けよう……」

俺は弱々しく応えた。

隣で吉弥が仲居に向け、大声を張り上げる。

「お替り！」

翌日、俺は浅草に姿を表した。休息は現実世界で取っている。品川の、裏長屋の、あんな狭い部屋に寝転がるなど、考えられない。なにしろ、たった二畳の部屋なのだ。

すでに小仏の関所で、登録を済ませているので、次回から出現するのは、江戸に幾つかある出現定点を利用できる。わざわざ品川の大木戸を潜って、えっちらおっちら江戸に入府しなくとも済むのだ。俺の利用したのは、浅草寺境内の、他人目につかない場所だった。江戸にはこういった定点が幾つもあった、俺たち【遊客】が利用している。そのため、【遊客】は、江戸町人にとって、神出鬼没の不思議な連中と見做^{みな}されている。

火付盗賊改方頭の、榊原源五郎の屋敷は浅草清川神社の近くにある。三百石取りの旗本で、長屋門のある、広壮な屋敷である。

通用口を潜り「頼もう！」と大声を張り上げると、昨日も見た同心が応対に出た。俺の顔を見て、胡乱な表情を浮かべた。

「源五郎はいるかえ？ 鞍家二郎三郎が来たと、報せてくれ」

俺に声を掛けられ、同心は厭そうな表情を浮かべる。

歳は確か、四十過ぎで、主人の源五郎と同じ年である。忠実そのものの性格で、俺のような胡乱^{うろん}な浪人に、上役を呼び捨てられたのが面白くないのだろう。

お生憎様、俺は【遊客】で、生まれながらの侍じゃあない。礼儀作法など、最初っから頭に無いのだ。

「どうした、報せに行かないのか？ 俺が来るのは、源五郎も承知

して、待っている。あんたが報せに行かないのなら、俺は勝手に屋敷に入るぜ！」

「待つてろ！」

腹立たしさを顕わにして、同心はくるりと背を向け引つ込んだ。

ほどなく、玄関に屋敷の用人を兼ねる、熊川左内という与力が姿を見せた。年齢はおよそ七十近く。江戸の平均寿命は五十に届かないとされるが、それは乳幼児の死亡率が高かったためである。壮年を無事に過ごせれば、長生きの人間は多かった。

この老人も、七十近くではあるが、^{かくしゃく}豊饒トウニョウとしている。役職は与力ではあるが、何しろ、七十近くである。主に屋敷内の細々とした仕事を受け持ち、家令のような役割を担っている。

老人はじろり、と俺を睨みつけた。恐らく、さっきの同心が、俺の無礼な態度を御注進にあそばしたのだろう。

無言で顎をしゃくり、案内に立つ。俺は履物を脱ぎ、大小を外して右手に持ち変える。このくらいの礼儀は心得ている。

「少し、口の利き方に気をつけて貰えぬか？ お頭様はなぜかお主の無礼を咎めぬが、もそつと気を付けて貰いたい」

左内は歩きながら小言を垂れた。

うんうんと、俺は無言で頷くだけだ。

老人は俺たち【遊客】については、源五郎ほど詳しくは知らない。しかも俺は、創設メンバーの一人という、特別な地位にある。將軍御目見の権利を持つので、旗本の榊原とは名目的にも、同じ身分と言ってよいのだ。

渡り廊下を進み、客間のある離れへ向かう。

庭には楠木くすのきの巨木が、樹影を、屋敷の屋根へ投げかけている。林泉があり、石灯籠が据えられ、小規模ながら約束通りの庭園だ。池を眺める場所まで来ると、老人は廊下に膝をつき、障子の向こうに声を掛けた。

「お頭様……鞍家殿と申される……」
「入ってもらえ！」

間髪を入れず、障子の向こうから源五郎の声が響く。左内老人は「はっ」と畏かしこまると、両手を伸ばして障子をからりと開け放つ。

十畳ほどの客間である。

床の間を背に、主人の源五郎が正座し、向かいに一人の侍が座っている。二人の前には湯飲みと茶菓子が出され、俺が来る前に何か相談していた気配であった。

侍には見覚えがなかった。初めて見る顔だ。

ひよろりとした痩身で、年齢の見当が付き難い表情をしている。両目が鋭く、俺を見て視線が忙しく動いた。目の奥に、俺を素早く評価する光が浮かぶ。どこことなく、浮世離れた雰囲気漂わせている。

火付盗賊改方頭の屋敷にいるよりは、江戸城の、御書物蔵に籠もって、書物と顔を突き合せていたほうが似合いそうな佇まいだ。

俺は侍に顔を向け、ニタリと笑い掛ける。次いで源五郎に向かい、口を開いた。

「こつちのお客が、俺に紹介したいという【遊客】かね？」

源五郎は、目を微かに見開いた。俺の口の利きように、左内老人がありありと顔を顰しかめる。何か言い掛けるその瞬間、源五郎が落ち

着いた口調で命令した。

「左内！ 下がってよいぞ！」

「はあーっ！」

左内老人は這いつくばると、早々にその場を退散した。これ以上、俺の無礼な態度を見過ごすのは、居たたまれないのだろう。

俺は、どかりと二人の中間に胡坐を掻いた。源五郎は腕組みをして話し掛ける。

「どうして、その御仁が【遊客】だと判る？ まだ、名前も紹介しておらぬぞ」
「判るさ」

俺は、ジロリと侍を見やった。

「俺たち【遊客】は、お互い【遊客】かそうでないか、即座に判るような仕組みを持ち合わせている。そうでないと、色々と不都合が起きる。さて、改めて御紹介頂こうか？」

まつばらげんのすけ
「松原玄之介と申します」

侍が口を開いた。ひどく掠れた、聞き取りづらい声音だ。

「成る程……」

源五郎は納得したように頷く。俺は源五郎に向け、眉を顰めて見せた。

「昨夜の話じゃ、俺に与力の相棒をつけるって言っていたな。与力はどうした、まだ来ないのか？」

ちらつと源五郎は、松原玄之介と名乗った侍に目をやった。

「その御仁が、俺が紹介する与力だ。火付盗賊改方与力、松原玄之介である！」

「何だって！」

俺は言葉を失った。

「それじゃ、【遊客】というのは？ もう一人いるのか？」

「御名答！」

天井がかたりと音がして、俺が見上げると、天井の板がずれ、そこから新たな顔が覗いた。

額に鉢巻をして、髪はポニー・テールにしている。袖無しの上着に、背中に短い刀を背負っていた。

女忍者の登場だ！

【遊客】同士が確認し合うには、ある程度の距離内でないと無理である。天井に潜んでいたのも、俺には女忍者の気配シグナルが感じ取れなかったのだ。

ぶらんと逆さまに顔を出すと、くるりと蜻蛉とんぼをうつて天井にぶら下がり、そのまま、すんと座敷に飛び降りる。

そこまでは良かったが、飛び降りた瞬間、尻餅をついた。どでんと派手な音がして、女忍者は尻を掴んで蹲った。

「痛——いつ！」

大袈裟に呻あきいいて、顔を顰める。

晶あきいだった。

俺は、いかにも間の抜けた面をぶら下げていたろう。晶は慌てて座り直し「何か文句ある？」とでも言いたそうな顔を見ると、澄ました表情を作ってツンと顎を上げた。

「お、お、お前！ な、な、何で？」

俺は完全に頭の中が真っ白になっていた。まさか、この女が登場するとは、今の今まで完全に予想外だった。

晶は、にいーっ、と『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャー・キャットのような笑みを浮かべた。

「あんたに言われた、品川の口入屋に、あたしの就職先を紹介して貰ったの！ 大したものね！ 伊呂波の旦那って名前を出したら、口入屋の親爺、親身になって相談に乗ってくれたわ。それで、榊原さんに、紹介状を持ってやって来た、って訳」

源五郎は「榊原さん」という晶の言葉に、ピクリと眉を上げただけで何も言わなかった。本来なら「お頭」と呼びかけるべきだが。

源五郎は腕組みをして、表情を変えず、俺に向かって口を開いた。「この娘、江戸で何やら人捜しをしたいそうじゃ。しかし、江戸については、まるっきり無知でな。それで、まず江戸の人情、地理などを身につけるため、儂の所へ口入屋が案内したのじゃ。何しろ火付盗賊改の仕事は広範囲にわたるでな。女であるから、同心などにはなれぬが、まあ、岡っ引き、下っ引きなら、あり得ぬ訳ではない。その、松原玄之介与力の配下という名目で、お主に面倒を見て貰いたい」

俺は、仰け反っていた。

「俺に？ こいつの面倒を見ろつてのか！ 冗談じゃない！ こんな、ただの時代劇ファンなんか、お荷物でしかない！」

晶は憤然として、俺に噛み付いた。

「何が、お荷物よ！ それに、いつ、あたしが時代劇ファンだなんて、あんたに言ったの？」

俺は晶の反撃に首を捻った。

「時代劇が好きで、江戸に来たんじゃないのか？ だって、その女忍者姿……」

「あたし、時代劇なんて、大っ嫌い！ あんなの、爺さんや、婆さんが見るもんじゃないの。江戸で色んな場所に忍び込む場面があるかもしれないから、忍者になったの！」

俺は、源五郎の言葉の切れ端に引っ掛かった。

「人捜しが目的だと言ってたな。本当か？」

晶は頷いた。

「本当よ。でも、今は言いたくない」

晶の表情は頑なだった。

源五郎は人の悪い笑いを浮かべると、立ち上がった。

「さて、僕は仕事が詰まって、そろそろお主らの相手もしてはおられぬ。後はお主らで、良いように相談せい！」

座敷をさっさと退出する寸前、俺に向かって思い出したように質問を投げかける。

「ところで、時代劇ファンとは、何じゃ？」

俺はズッコケた。

三

源五郎が退出し、可笑しそうに、俺と晶の遣り取りを見守っていた玄之介は、唇を湿らせ、口火を切った。

「さて、これから、いかが致します」

俺は玄之介に向き直った。この男、中々江戸には慣れているようで、口調はかなり侍らしくこなれている。

「源五郎から、事件については、何か聞いているかえ？」

「はあ。貴殿が江戸で死体となって見つかった顛末については詳しく。何でも、水死体だったそうですね。やはり、他殺ですか？」

晶は、キョトンとした表情になる。

「殺人事件！ 本当？」

次いで両目がキラキラとしてきた。薄笑いを浮かべ、興味津々といった顔付きである。

俺は、ぶるん、と首を振った。

「判らん。他殺だった可能性は強い。何しろ、俺は【遊客】だからな。死体になる前に、現実世界へ脱出できなかったのが、どうにも理解不可能だ」

玄之介は考え深げな目つきになった。

「お頭の説明には、検校という名前が出たそうですね。本当の検校が、貴殿の事件に関わっておるのでしょうか？」

俺は再び首を振る。

「それも判らん。俺の勘じゃ、本物の検校じゃなく、渾名が自称だと思う。しかし、確かめる必要はあるな」

「ははあ……」と嘆息する。

晶は俺たちの遣り取りが、さっぱり理解できない様子だ。

「何か問題でもあるの？ とにかく、捜査を開始しましょうよ！ 殺人事件なんて、あたし初めて！」

まったく、お気楽な娘である。この調子で従ってこられるかと思うと、うんざりだ。

俺は、やむなく説明した。

「検校とは、目の見えない連中の最高位だ。その身分は、幕府によって守られている。一種の大名と同じともいえる。俺たちが、簡単にどうのこうの対処できる相手じゃない」

玄之介が口を挟んだ。

「しかし、手懸りにはなりますでしょう。まず、会って見る必要はありますな。江戸で現在、検校を名乗っているのは……」

俺は頭の中で、江戸についての最新情報を検索した。【遊客】は、常に仮想現実の情報を入手できる。たちまち、回答が出た。

同じ検索を、玄之介もしたのだろう。お互いの視線がかち合った。

「松戸検校！」

二人とも同時に声を上げていた。

俺は再び検索に戻り、松戸検校についての詳細を入手した。それによると、松戸検校とは、かなり厄介な相手らしい。

厄介というより、変人の部類に入る。

俺は立ち上がり、屋敷に響き渡る叫び声を上げる。

「左内！ 左内はいるかえ？ 頼みがある」

俺の叫びに、左内老人が皺深い顔に、思い切り渋面を張り付かせ、急ぎ足でやってくる。

「堂間^{どうま}声を張り上げおって！ 拙者の名前を、気安く呼ぶでない」俺は宥^{なだ}めるために、手を上げた。

「すまん！ あんたの力が必要だ」

左内老人は、顰^{しか}め面を保ったまま返事をした。

「それで、用と申すは？」

「松戸検校に会いたい。人を遣^{つか}つてくれないか」

老人は驚きに、両眉を思い切り跳ね上げた。

江戸では、人を訪ねる際、かならず事前にアポイトメンを必要とする。特に、相手が身分あるなら、なおさらだ。

この場合、我々が訪問しても良いかどうか、会うならいつの時間が都合が良いか、確かめなければならない。

このため、他人を訪問するのは、場合によっては、一日がかりの仕事となる。

左内老人は、源五郎に言い含められているのだろつ。俺の頼みを、ぶつぶつ文句を垂れながらも、手早く叶えてくれた。

俺たちは、返事を待った。

四

検校の屋敷から、左内老人が管理する巢箱に鳩が戻ってきた。足には、文が縛り付けられている。

江戸では鳩の帰巢本能を使った、伝書鳩が普及している。もちろん、俺たちの江戸でだ。検校の屋敷に人を遣^やるとき、鳩を懐に入れて遣わせたのだ。

俺たち【遊客】の知識を、江戸の人間たちは即座に吸収し、俺たちも驚くような結果として表わしてくる。

俺たち創立メンバーは、よほど悪い結果をもたらすと思われる例外を除いて、たいてい黙認している。例えばマルクスの『資本論』を江戸に持ち込もうとした【遊客】がいたが、丁重にお引取り願った事件があったが――。

それはともあれ……。

検校の返事は、意外にも「すぐお出で願いたい」というものだった。与力の玄之介はともかく、俺のような正体不明の浪人にも会って良いとは、信じかねた。

俺たちは左内老人に手配してくれた礼を言い、源五郎の屋敷を後にする。

松戸検校の棲家は、そう遠くはなく、神田明神の近くにあった。現実の地理では、秋葉原の駅近くである。しかし、歩いて行くには、

少し時間が掛かりそうだ。

俺は人力車を頼んだ。

人力車？

そう、江戸時代には存在しないものだ。明治以降盛んになったが、江戸時代では大八車以外に、車輪を使った道具はほとんど見かけられない。しかしこの江戸では、【遊客】の影響で、様々な新奇な道具が普及している。

江戸時代の常識として、幕府は新奇な道具を何でもかんでも禁止したように思われているが、決してそうではない。当時の技術レベルが、そこまで追いついていなくて、また社会的な背景が、許さなかったせいもあり、停滞していたように思われるが、様々な分野では結構、革新的な事物があった。

例を挙げれば、大坂の堂島では、世界初の先物取引が行われていた。また簿記の分野でも、現代とほぼ同じ複利計算とか、記帳の方法などが普及している。

発明家としては平賀源内が有名だが、幕末に現れた「からくり儀右門」こと田中久重がある。この田中久重は、現在の東芝の創業者でもある。田中久重が発明した「無尽灯」は有名である。

車輪を利用した乗り物——馬車とか——が受け入れられなかったのは、やはり道路事情があるのだろう。江戸時代に道交法がなかったように思われるだろうが、ちゃんと大八車で相手を怪我させたり、死亡させた場合の刑罰も定められていて、現在とは段違いに厳しい罰則が定められている。

その点、人力車は人が引っ張るもので、馬車などに比べると、江

戸の道路事情に合っている。但し、明治時代の人力車と違い、ベースは大八車を改造したものである。木製の車輪がついていて、幅広の台に、乗客が座れるような毛氈が延べられている。

梶棒^{かじ}を引く先手と、後から押す後手の二人で動かすところは、駕籠と同じだ。

「あらよっ！」と掛け声を上げ、二人の車引きは、威勢良く人力車を走らせる。

がらがらと木製の車輪が道路を噛み、俺たち三人は、ぐらぐらと揺れる台の上から飛び出さないよう、郭^{かく}と呼ばれる台車の手摺にしがみついた。

「まったく、ふざけておりますな！ 江戸の町に、人力車とは！」舌を噛みそうな揺れの中で、玄之介は忌々しげに叫んだ。がたがたと騒々しい車輪の音に負けまいと、声を張り上げる。

俺は叫び返した。

「気に食わないのか？」

「当たり前でしょう！ この江戸は、てんで時代考証を無視しています。先ほどの伝書鳩は、なんですか？ あのようなものを、よく許しておりますね。貴殿は、この江戸を創立した一人とお聞きしましたが、時代考証については、どうお考えなのです？」

玄之介の顔は、真剣だった。俺は奴の勿体ぶった面つきに、ぷつと吹き出した。たちまち、玄之介は怒りに顔を赤らめた。

「あんた、考証派の一人だな？」

俺の指摘に、玄之介の視線は動揺を隠せない。

五

晶が質問してきた。

「考証派って、何よ？」

「読んで字の如しだ。江戸を再現するには、何から何まで、時代考証をきっちり押さえるべきだと主張している連中だね。俺たちが作ったこの江戸に、大いに文句がありそうだ」

玄之介は言い返す。

「そのの、どこが可笑しいのです？」

俺は、ちよつと首を竦めた。

「可笑しくはないがね。ただ、あまりに教条的すぎやしないかと思うだけさ。ここは仮想現実だ。本物の江戸とは違って当然だろう？」

他の江戸はどうか、知らないが」

晶は俺の話に目を見開いた。

「他にも江戸があるの？ 仮想現実」

俺は頷き、玄之介に目をやった。玄之介は横を向き、押し黙っている。

「あるさ！ 仮想現実が普及してから、色んな連中が江戸を再現してきた。多分、その玄之介の旦那は、最も時代考証を重視した、東京都肝いりの江戸からやって来たんじゃないのかな？」

玄之介はちゃんと聞いているようだ。見る見る顔が茹蛸のように真赤になる。

俺の悪い癖で、つい追い討ちを懸けた。

「東京都肝いりで、江戸を隅から隅まで時代考証で、固めた江戸ができた。ところが、その江戸は、完成してから不思議と活気がなくなり、江戸の繁華も見ると影もなく寂れてしまった。今じゃ、訪れる

【遊客】も、ほんの僅かだ」

とうとう玄之介が口を開く。

「鞍家殿。貴殿の口振りでは、あの江戸が寂れた原因が、判っておりそうですか？」

俺は、ひらひらと手を振って見せた。

「俺は学者じゃねえからな！　だが、俺の思うに、町ってのは生き物だ。新しい血が入らないと、生きる力を失うんじゃないのか？　あの江戸は、あまりに窮屈すぎた！　【遊客】の入国条件も、物凄く厳しく、ほんのちよつとでも、史実にそぐわない行動をとると、即座におっ放り出される仕組みだった。あれじゃ、よほどの物好きか、マゾな人間しか、居つかねえよ！」

玄之介はジロジロと晶の服装を見詰める。

「成る程……。晶殿のような、珍奇な衣装をしても、ここの江戸町人は何も言いません。慣れ切っておるようですね！」

玄之介は、それきり黙りこくりに、何か物思いに耽っているようだ。人力車は順調に快走を続け、遂に目的地が近づいてきた。

神田明神近くは門前町を形成し、広い通りができています。人力車を降りた玄之介は、驚きの声を上げた。

「何ですか、これは？」

俺は笑いを堪え切れなかった。

コチコチの石頭らしき玄之介が、こっちの江戸の秋葉原を見てどう反応するか楽しみだったのだが、案の定だ！

俺は玄之介の肩を、ポンと叩いて促した。

「行こうぜ。愚図愚図していたら、日が暮れらあ！」

六

神田明神前の通りは、まるでお祭り騒ぎであった。

いや、実際にお祭りをしていた。

見渡す限り人の波で、巨大な山車が繰り出し、演台では半裸になった男たちが、一斉に太鼓を叩き、笛を吹く。吉原から呼んで来たのだろう、芸者たちが三味線を抱えて力一杯の演奏を続けている。

玄之介は演奏に耳を傾け、首を捻る。

「妙ですな、旋律が江戸のものとは、思われませぬが……」

聞き惚れていた晶が、不意に叫んだ。

「これ、ロックじゃない？ ほら、太鼓のビートがそっくり！」

晶の指摘に、玄之介は目を剥いた。

「まさか！ なぜ、ロックなのです？ 誰がそのような曲を持ち込んだ…… あつ！ まさか、【遊客】が？」

俺は頷いた。

「その通り！ ロックだけじゃないぜ。ほら、あれを見る」

指さす方向には、様々なド派手な衣装に身を包んだ、一団が思い思いのリズムで手足を舞わして踊っている。

この暑い季節に拘わらず、分厚い綿入れを身につけている者、高々とぶつ太い茶筌髷を結っている者。巨大な薙刀を背負っている者などが、顔には衣装に負けず劣らず、白粉、隈取などを塗りたくりのし歩いている。

これは男供であったが、同じように、目がチカチカしそうな色合いの衣装に身を包んだ女たちの一団も見受けられる。赤、青、緑、

などの三原色に、黒、白のハッキリとしたコントラストの襟、髪型はこういっちゃ何だが、現代のキャバ嬢そっくりである。むろん、黒髪は一人もおらず、赤や茶色、金髪などに染め上げている。

「な、何ですか？　なぜ、このように【遊客】が集まっているのです？」

「全員が【遊客】じゃない。もとの江戸の町人も混ざっている。多分、武士もいるんじゃないのか？」

玄之介は呆然となっていた。

「それで、この扮装は何ですか？」

「里見八犬伝じゃないかな？　あつちが忠臣蔵かもしれないな。こちらはどうか、真田十勇士らしいが……」

江戸時代の講談だけでなく、立川文庫まで混ざっている。

玄之介は益々混乱しているようだ。俺はそろそろ玄之介をからかうのが飽きてきた。通りに面して店を開いている、一軒に招き寄せる。店は本屋だ。

「これを見な」

俺の指さした方向を覗き込んだ玄之介は、店先に並んでいる、平綴の本の表紙を声を上げて読んだ。

「南総里見八犬伝……。珍しくありませんな。これがどうしたと？」

「中身を見てみる」

玄之介は一冊を取り上げ、ぱらりと開き、驚きに仰け反っていた。

「こ、これは！」

玄之介の手許を覗き込んだ晶は、叫んでいた。

「これ、漫画じゃない！」

晶は爛々と目を輝かせ、貪るように紙面を読み進む。本屋の親爺が、立ち読みに苦い表情を浮かべているので、俺はさっさと本の代金を支払ってやった。親爺は「おありがとう御座い……」と呟き、引っ込んだ。

開いたページは、現代の日本の漫画そのままに、駒割りがなされ、吹き出しが描かれていて、このまま現実世界へ持ち込んで製本すれば、即座に販売できそうである。

実際の江戸では、本は行商の貸し本屋が巡回して、それを回し読みするのが普通である。が、こちらの江戸では、小売が圧倒的に盛んになっている。

「江戸に入府してきた【遊客】が描いたんだ。入府の時、絵師と申請してきたんで、そのまま通したんだが、まさか漫画家とは思わなかった。まあ、絵師でも間違いないが」

玄之介は本を手に持ち、ぶるぶると細かく震えている。相当、シヨックだったらしい。

俺は解説を続けた。

「奴ら、江戸の秋葉原に根城を作って、江戸の浮世絵双紙の彫師、擦り師などと連絡を取って、漫画を普及させちまった。題材は、さすがに江戸町人が理解できるよう、八犬伝とか、忠臣蔵などを使っているが、まったく別物になっている」

玄之介は理解できないと言いたげに、ゆるゆると首を振っている。俺に顔を向け、弱々しく尋ねる。

「なぜ、そのように酔狂な真似を？」

俺はつい、苦々しげな顔になっていたろう。

「奴ら、この江戸に秋葉原のオタク文化を根付かせたいんだと！漫画を出発点に、何とアニメまで持ち込みやがった！」

玄之介の口端が、笑いの形に吊りあがる。が、目は全然笑ってい

ない。

「ば、ば、馬鹿な！ 江戸にアニメなど、持ち込めるわけがない！」
「それができるんだな。ほら、あっちでは、新作のアニメを上映している」

通りの先が火除け地になっていて、そこに急造の芝居小屋が掛けられている。上映時間が近いと見えて、小屋の入口には、客が長々と入場を待っていた。

入口近くには、演じる出し物の大看板が架けられていた。内容は江戸の歌舞伎と同じだが、看板の絵柄はほとんど、アニメ絵そのままだ。

玄之介は憤然となった。

「行き過ぎではないですか？ 江戸に現代のテクノロジーを持ち込むのは！」

俺は首を振った。

「いいや。現代のテクノロジーは、まったく関係ない。江戸時代にも、アニメがあっただ。もっともアニメなんて呼び方じゃなく、江戸写し絵といていたが」

玄之介の口が、ばかりと丸く開いたままになっている、完全に、呆氣に取られたという顔つきだ。

「写し絵！」

晶が質問してきた。

「何よ、写し絵って？」

俺は説明したが、段々面倒になってきた。

「幻燈のようなものだ。スライド式に、何枚もの絵を光を通して上映する。手法は原始的だが、今のアニメと通じる原理で、江戸時代

には結構盛んだっただけ。まさか今のアニメ絵柄を、持ち込むとは思わなかったが」

晶は、ぱつと顔を輝かせた。

「あたし、見たい！」

「ふえっ？」

俺は妙な溜息を漏らしていた。まさか、この女忍者が、オタ女だとは思ひもなかった！何も言わなければ、晶は芝居小屋に一散に駆けて行きたそうな勢いである。

「後にしろ！俺たちの目的を忘れたか？」

玄之介が我に返ったように頷く。

「そうであつた！まず、松戸検校なる御仁と会見せねば！」

可笑しなもので、俺が目的を思い出させてやると、早くも口調が武士らしく戻る。

晶は出鼻を挫かれ、口を不満そうに歪めた。

「で、松戸検校って、どこにいるの？」

「あそこにいる」

俺は指さした。

人並みを掻き分けるようにして、もう一つの山車が静々と近づいてくる。演台には黄八丈の振袖を着た、若い娘たちが踊りながら、歌っている。

その背後に、一段高く演台ができていて、一人の琵琶法師が彌環を抱え、撥を握って、嫋々と曲を奏でていた。

琵琶法師は眼鏡を掛けている。が、レンズは黒々と塗り潰され、サングラスそっくりに見えた。ちよつと、レイ・チャールズに似ている。

見物客が騒ぎ出した。

「いよっ！ 検校様と、秋葉娘のお出ましじゃ！」「日本ー！」「

玉屋！ 鍵屋！」「大統領！」

まるで場違いな掛け声を掛けているのは、恐らく半可通の【遊客】だろう。

見物客の声援を受けているのが、俺たちが会いに来た松戸検校であつた。

七

♪ 祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり
♪ 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす
♪ 驕れる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし……。

『平家物語』冒頭である。

松戸検校は、彌環を掻き鳴らし、声を張り上げ、吟じている。が、曲調はロックで、時折「イエーイ！」と、合いの手を入れた。

群がっている見物客は、ノリノリで、上下に身体を揺すりながら、忘我の状態になっている。

ひとしきり曲を演奏すると、検校は汗みずくになって立ち上がり、演台から身を乗り出すようにして、観客に叫ぶ。

「おのれら、成仏しておるかっつ？」

「おおーっ！」

「善哉、善哉！ おのれら、この佳き日を、忘れるでないぞっつ！」

検校が手を振ると、観客も一斉に手を振り返し、騒然となった。わっ、わっとなんと大声を上げ、首を振り、熱気が湧き上がる。

俺たちは騒ぎの中、ぽつんと静まり返った孤島のように、ただただ啞然呆然慄然、呆気に取られていた。

晶だけは、頬を真っ赤に染め、他の観客と一緒に声援を送っている。

検校は満足そうに頷いていたが、ふと顔を傾け、片方の眉をぐいと持ち上げて見せた。

ただそれだけの变化に、観客たちがしーんと静まり返った。

撥^{はち}を振り上げた検校は、弦を「びーんっ！」と、一度だけ掻き鳴らした。余韻が静寂の中、滲み込むように響き渡る。

検校は唇を「ほ！」と窄める。

「この中に、儂の知らない御仁が混じっておるようじゃな。それも三人！」

ぐつと俺たちに向かって、首を捻じ曲げる。黒眼鏡の奥から、検校の視線が突き刺さるように感じる。検校は、にやっと笑った。

「そこな三人！ 今しがた、儂の許へ、面会を申し出てきた客人じやな？」

玄之介は顔色を真つ青にさせた。

「み……見えるのですか？」

小声で俺に呟く。俺は首を振った。

「いいや、あいつは、目が見えないはずだ……。そうでなくては、絶対に検校にはなれない」

検校は、俺たちの会話を耳にしていたのだろう、にんまりと笑って大声で吠え立てた。

「儂はこれ、この通り、目は不自由じゃ！ しかし、目明きに負けず劣らず、物はちゃんと見えておるぞ！」

たたたっ！ と、演台を駆けると、ぱつと空中に飛び上がる。そのままぼーん、と空中で一回転をして、地面に飛び降りた。

ばさばさと、肩から提げている袈裟が風音に靡^{なび}いた。のしのしと大股で歩くと、俺たちに向かって近づいてくる。

でかい！

江戸にこのような巨体を誇る人間がいるとは、意外であった。背は完全に俺の頭二つ分は高く、体重も俺より倍はありそうだ。

「【遊客】の侍二人に、若い女が一人とは、ちと妙な組み合わせじやな？ ふむ……」

晶に近々と顔を寄せ、くんくんと鼻を鳴らし、空気の匂いを嗅いでいる。やがて会心の笑みを浮かべ、背筋を伸ばした。

「そこのおなご、中々の別嬪と思ゆる！ よしよし、儂に従いてまいれ！ 屋敷に案内いたそう！」

くるりと背を向けると、さっさと歩き出す。俺たちが従いて行くと、確信しているようだ。

俺たちは、完全に毒気を抜かれ、ぼんやりと顔を見合わせた。

玄之介が一、二度、ぱくぱくと口を何度か開閉させ、やっと声を絞り出した。

「ど、どうしましょう？」

俺は顎をしゃくった。

「行くぜ！ あつちが、従いてこいと言っているんだ。御招待に応じようじゃないか！」

俺が歩き出すと、玄之介は釣られたように歩き出す。晶はボケツとしたまま、呆然と立ち竦んでいたが、俺たちが遠ざかると、慌てて小走りに従いてきた。

大股に歩く検校は、完全に目が見えるように、自信ありげに進んでゆく。時折、思い出したように、腕に抱えた彌環を「びーん、びーん」と鳴らした。

あの弦で、反響音を探っているのか？ まるで蝙蝠こうもじのエコー・ロケーションである。この分では、真っ暗闇でも、何不自由なさそうだ。

検校は表通りから裏へずんずん歩いて行く。時々、通りすぎる町人が、検校に気付いて会釈すると、検校は機嫌良く応じている。

とうとう、堪りかねたように、玄之介が足早になると、検校に並んで話し掛けた。

「卒辞そつじながら、少々お尋ねしたい！」

「何じゃな？」

検校は悠然としている。

「そなた、本当に目が見えぬのか？ 信じられぬ……」

検校は仰け反って「わはははは！」と呵呵大笑した。

「この辺りは、儂の掌たなごころを差すように判るでな！ 初めての場所では、こうは行かぬ！ ま、慣れれば、そうではないがな……。おっ、ここじゃ、ここじゃ！」

首を竦めると、ひょいっと小腰を屈め、小ぢんまりとした家屋に飛び込んだ。検校の屋敷にしては、驚くほど手狭である。

「帰参いたしたぞ！」

辺りに轟き渡るような大声を上げると、奥からぱたと足音が近づき、一人の女が飛び出し、式台に指をついた。

「お帰りなさいませ」

「うむ。客人がおる。用意をせよ！」

検校の声に、顔を上げた女は、年齢三十がらみの、落ち着いた物腰の婦人であった。

髪型や、服装から見て、既婚女性らしい。だが、まさか検校の妻ではないだろう。僧形の者が、妻帯はできない。

もしかしたら、妾かもしれない。おおっぴらではないが、浄土真宗以外の僧が、妻帯していたのは、公然の秘密であった。浄土真宗は妻帯できる。

笑いを浮かべると、白い歯が覗く。

眉はそのまま、鉄漿おはぐろはしていない。

俺たちは江戸を再現する際、女性の眉、鉄漿などは採用しない決定をした。そりゃ、既婚女性が眉を落とし、鉄漿をするのは、史実に合っているかもしれないが、現代で育った俺たちにとっては、ぎよつとする奇つ怪な眺めである。

検校の屋敷は間口は狭いが、奥に長々と伸びている造りで、長い廊下を案内され、座敷いざなに誘われた。からりと障子を開けると、座敷には黒猫が一匹、香箱を作っている。

どすどすと足音高く検校が踏み込むと、ぴよこりと首を挙げ、横飛びになつて逃げていく。

どっかりと腰を降ろし、検校は腕組みをした。その様子は、とんと山賊の親玉だ。

「さて」

検校が口火を切る。

「お主たちの用件、窺おう。火付盗賊改方与力とは、たれじゃな？」
「拙者で御座る」

ずい、と拳を畳に押しつけ、玄之介が膝をにじらせる。検校は俺に顔を向け、叫ぶように声を掛けて来た。

「それなら、そこにおるのは、鞍家二郎三郎とか申す、江戸創業の

【遊客】じゃな？」

俺は心底、驚いた。

「俺を知っているのか？」

検校は、ニツタリと笑いかけた。

八

松戸検校は、不気味な笑いを浮かべ、俺に顔を向けている。

黒眼鏡が、顔の上と下を、くつきりと分けていた。下半分は笑いを浮かべているが、上半分には笑いはない。

俺は、ひやりとした寒気が、背筋を這い登るのを感じていた。

まさか……。俺を狙っている検校とは、こいつなのか？ 俺は、ウカウカと敵の罠に、まっしぐらに飛び込んだのか？

密やかな足音が、背後から近づいてくる。俺は、ぎよっとなって上半身を捻じ向け、足音の主を見た。

式台で、俺たちを出迎えた、あの婦人が手に盆を抱え、廊下に膝をついた。

「お暑いでしょうから、甘酒をお持ちしました」

淑やかにお辞儀をすると、手早く俺たちの前に甘酒の入った湯呑みしとを配る。

俺は喉がからからに渴いていたので、大喜びで飲み干した。飲み干した瞬間「まさか、毒？」と疑念が湧いたが、もう遅い。俺はいつも、考えなしで行動する。

旨い！ 甘酒に、生姜をほんの少し効かせている。甘酒は良く冷えていた。

玄之介は自分の前に湯飲みが置かれると、軽く頭を下げ「御造作をお掛けする」と礼儀正しく挨拶する。晶は、湯呑みの中身を一口そつと含むと、旨さにニツコリと微笑んだ。

甘酒は、江戸では夏バテ防止に効能が顕著な、夏の飲み物で、俳

句の季語にもなっている。

先ほどの婦人は、検校の前に徳利と、干鰯を持ってきた。検校は干鰯を箸って徳利を傾け、手酌で飲み始めた。とんだ、生臭坊主である。

ぶわはははは……と、検校が爆笑する。

「知らんのか！ 儂は、検校という立場上、お上の役人や、大名と付き合いがあるからのお。お主は、創業者の一人として、当然、勤めなければならぬ義務から、逃げ回っておるそうじゃの？ 老中どもが、こぼしておったぞ！ 鞍家二郎三郎は、気楽な浪人暮らしに、どっぷり浸りおって、お城にも顔を出さぬ、とな！」

検校の言葉に、俺は溜めていた息を吐き出した。

驚かせやがって！

晶は甘酒をちびちびと飲んでいる。ちらりと俺を見て、尋ねる。

「あんたの義務って、何よ？」

「それはな」と検校が応じる。晶に一旦、顔を向け、もう一度さつと俺に顔を戻した。

「こやつは、創業者の一人として、老中を勤めねばならぬ義務があるのよ。何でも、創業者たちは、江戸を治めるため、月番で老中に登板せねばならぬと、決まりを作ったそうじゃ。ところが、こ奴は一度たりとも、その義務を果たしておらん！ のうのうと、気楽な浪人暮らしを楽しんでおるのじゃ！」

晶は、何とも言えない表情を浮かべている。

「ふーん……。あんたって、偉いんだ！」

それにしても、口調にはまるつきり尊敬など含まれていない。俺は苦り切り、検校に向かって口を開く。

「俺の義務は、この際、どうでもいい！ あんたには関係ない話だ。それより、聞きたいのは……」

「何じゃ？」

検校は顎を上げた。

「弁天丸という、若い男の名前に、心当たりはないか？」

検校の面つきには、何の変化もなかった。眉一つ動かさない。微かに首を傾げ、思いつくそうとしているが、やがて首を振った。

「知らぬな。聞いた名前ではない。船の名前ではないのか？」

「へっ？ 舟の名前？ 何だ、そりゃ！」

俺は検校の真意が判らない。検校は得々と、俺に向かって蘊蓄を垂れる。

「昔の話じゃ！ 浦賀に、弁天丸という名前の舟が入っておったが、その舟の水主が、遊ぶ金欲しさに、舟の碇を繋ぐ綱を盗んで売り飛ばしてしまい、見つかり、死罪となった有名な事件がある」

「ふーん」

と、俺は不得した返事をした。後で調べたのだが、本当にそんな事件があったらしい。死罪になった水主は「ねんごろに弔ってくれば、首から上の病気を癒す神になろう」と申し出、寿光院に祀られたそう。妙な知識を披露する検校では、ある。

「そ奴が、何をしたのじゃ？ 儂に、どのような関わりがあるのじや？」

検校の声には、微塵も動揺は顕れていない。本当に、知らないらしい。

玄之介は無言のまま、俺に合図した。俺から説明しろと促しているのだ。俺は唇を湿し、最初から話し始めた。

俺の水死体上がり、再登録のため江戸に入府した早々、弁天丸という若い男が尾行して、俺が締め上げたら「検校」という名前が上がった仔細を喋る。検校は、じっと黙ったまま聞いている。

聞き終わり、検校は口をひん曲げ、不服そうな表情になっていた。

「怪しからぬ！ 言うに及んで、検校という名前を騙るとは！ 弁天丸とか申す、ヤクザ者の黒幕なのか、検校とは？」

喋っているうちに激昂してきたのか、段々剃り上げた頭が紅潮すると、こめかみ蟀谷に太い血管が浮く。

俺は頷いた。

「おそろくな。だが、なぜ俺に尾行をつけたのか、さっぱり判らねえ！」

玄之介は、ひっそりとした笑い声を上げる。

「多分、そ奴が鞍家殿を殺した相手なら、【遊客】なら再び江戸に舞い戻ると予測したのではないのかな？ 舞い戻るには、必ず高輪の大木戸を潜るはずと、弁天丸なる男を差し向けたのでしょう」

「確認するためか！」

俺は、ぼかりと、自分の頭を殴りつけた。

まったく、言われてみれば、馬鹿みたいに簡単な種明かしである。玄之介に指摘されないと、判らないとは、俺は何と間抜けなのだろう。

検校は鼻を鳴らした。

「糞面白くもない！ ただ検校という名前が出たから、儂に面会を申し出たのか？ まったく、手懸りとしては信じられぬほど、頼りない系じゃのう……」

俺は、相槌を打っていた。

「まったくだ。あんたに何の関係もないのは、予想できたが、念のためだ。悪く思わないでくれ」

検校はむつつりと、手酌で酒を飲んでいた。返事をするのも、面倒らしい。

さて、これからどうしようかと俺が思い悩んだその時、玄関の方角から、ばたばたという、誰かが駆け込む音が聞こえてくる。

検校が、くいつ、と顔を上げた。

玄関から、誰かの呼び声が聞こえる。

「検校様——っ！ 大変だあ！ ちょっと助けておくんなせえ！」

口調から推測すると、町人らしい。

検校は急に活き活きとして、素早く立ち上がった。足早に玄関に向かいつつ、吠えるように喚き返す。

「何じゃ、騒がしい！」

俺は立ち上がり、検校の後を追った。背後から、玄之介と、晶が従いてくる。

玄関に辿り着くと、式台に片手をついた、町人らしき若い男が、顔中を口にして喚いていた。

「喧嘩だあつ！ 臥煙^{がえん}と、旗本奴の連中が睨み合って、今にも喧嘩をおっ始めそうだ！」

「喧嘩だとおっ？」

怒鳴り返す検校の顔は、喜びに溢れている。

九

急ぎ足になった検校を追いかけながら、若い町人は早口に事情を説明した。

「明神様の祭礼中だつてえのに、旗本奴が押しかけてきて、難癖をつけたんで！」

「どんな難癖だえ？」

俺が聞き返すと、町人は首を竦めた。

「俺たちを招待しないのは怪しからん！ 祭礼には、旗本奴を招待すべきなのに、誰も何も言つてこないつてえ、ふざけた話でさ！」
町人は思い切り顔を顰めた。口調から、旗本奴への憎しみが窺える。どうやら、深刻な対立がありそうだ。

神田明神が見えてくると、大通りを二つに分けて、旗本奴の一団と、臥煙がえんの一団が睨み合っている。

臥煙——定火消し（町火消しではない）の異名である。旗本奴と同様、気風きふうと、男伊達を売りにした男どもであるが、こっちの江戸には女も混じっている。

両方、思い切り派手な色合いの着物を身に纏まとい、どことなく、現代日本の暴走族を思わせる。

現代日本の暴走族はバイクに跨またがっているが、こっちの暴走族は——自転車だ！

笑つてはいけない。本当に自転車に跨っているのだ。江戸に自転車など、あるわけがないと思われるかもしれないが、事実、自転車は存在した。彦根藩士の平石久平次時光（一六九六—一七七一年）が新製陸舟奔車と呼ばれる、木製の自転車を考案している。ペダル式で、フランスのミショーより、何と、一二九年も早い画期的な発明である。

双方が跨っているのは、その発展形で、車輪は前輪一つに、後輪二つである。平石久平次の自転車は、舟形の車体であったが、それに思い切り派手な飾りを付けている。

鯨しやうじのような彫刻や、龍の形を象かたどっている。臥煙側は、火消しの纏のような飾りをあしらっていた。色合いといい、派手さといい、現代の暴走族といい勝負である。

検校は武器にするつもりか、巨大な鉄扇を右手に握っている。放胆にも、双方の真ん中を大股で駆け抜け、大声を上げた。

「待て待て待てえ〜っ！ この神田明神で、喧嘩は許されん！ もしも喧嘩したくば、この松戸検校が相手だあ〜っ！」

言葉は一応、喧嘩の仲裁を買って出たように聞こえるが、検校の表情には、一騒ぎ起こしたい期待感が露骨に溢れている。

晶が、懷から、房つきの十手を取り出したので、俺は驚いた。

「どこでそんなもの、引っぱり出してきた？」

晶は、キョトンとした表情である。

「だって、あたし岡っ引きでしょ？ 岡っ引きなら、十手くらい……」

玄之介は、激しく首を横に振る。

「よいか！ 晶殿。十手というのは、お上の公式な捕り物道具であるぞ！ つまりは、警察の拳銃のようなものなのだ。許可なく所持すれば、厳罰に処される。だいたい、岡っ引き風情で房つきの十手など、身分違いというもの！」

「えーっ？」

晶は心の底から驚いた顔つきである。

時代劇では、町奉行所や火付盗賊改方に手先として使われる小者（目明し、岡っ引き、下っ引き等と呼ばれる）は、捕縛権を持ち、お上から房つきの十手を預かっているように描かれているが、実際

は大違いだ。

房つきの十手は、与力および同心の身分証であつた。従つて小者連中は、私的に房のない十手を所持している場合もあつたが、それも黙認という形で、本来は町人が持てるものではなかつた。

「これは、預かつておく」

玄之介は厳しい顔付きになると、晶から十手を取り上げた。晶は不満そうに、頬を見る見るぷーっ、と膨らませる。ちよん、と突付けば「ぱちん！」と音を立てて弾けそうだ。

そんな一幕の間にも、事態はどしどし進行している。旗本奴は、検校の飛び入りに盛んに悪罵を浴びせかける。

「引つ込め、坊主！ 抹香臭い説教など、まっぴら御免だあ！」

この悪罵に色めき立つたのは臥煙だつた。

「何おう！ 検校様を貶すのは、どこのどいつだ？ 出てきやがれ！」

検校はニタニタと、物凄い笑みを浮かべている。歯を剥き出し、顔は真っ赤だ。怒りながら笑う、という芸当の持ち主だ。

「そうかそうか、儂の説得は無駄であつた、という訳じゃな？」

ぐつと手にした鉄扇を突き出す。その迫力に、旗本奴たちは、たじろぎの色を見せた。

しかし気風と、男伊達の旗本奴である。自分たちが一瞬でも気後れたのを埋め合わせるためか、一斉に「わあーっ！」と雄叫びを上げ、検校に群がるように飛び掛る。

臥煙もまた、弾かれるように飛び出した。

往来の真ん中で、二つの集団が激突した！

検校は「わははははは！」と大声で笑い声を上げると、手にした鉄扇を振り回し、向かつてくる相手の額や、手足に打ち付ける。相

手は旗本奴だけでなく、臥煙も区別ない。

「それ！ 一本！ 儂の警策は、ちと痛う御座るぞ！」

実には上機嫌だ。骨の髄から、こういう騒ぎが大好きなのだろう。喧嘩が始まると、それまで群がっていた見物人は、一斉に逃げ散った。見物の一団に、一見すると場違いともいえる華やかな集団が見える。

何だろうと目を凝らすと、どうやら山車の演奏に呼ばれた芸者たちらしい。芸者たちは逃げ遅れ、どうしていいか判らない様子で、袋小路のような一角に集まり、身を竦ませている。それに旗本奴の一部が気がついた！

仲間を誘い、それつとばかりに芸者たち目掛け、殺到する。目に着いた芸者の手首を掴み、無理矢理ぐいぐい引つ攫おうとする。芸者は旗本奴の狼藉に、悲鳴を上げた。

「おい、助けに行こう！」

俺が玄之介に提案すると、鋭く頷く。俺たちは肩を並べ、救助に向かった。ちよつと振り返ると、感心にも、晶も走り出していた。

俺は腰の刀を鞘ごと抜いて、それで打ち据えようと一瞬、思ったが「いや、鞘が割れるな」と思い直した。ちらりと隣を走る玄之介を見ると、帯に晶の十手を挟み込んでいる。

「そいつを貸せ！」

素早く手を伸ばし、玄之介の帯から十手を抜き取る。俺のあまりの早業に、玄之介は抗議の声を上げる暇もなかった。俺は芸者の手を握り、引つ張ろうとしている旗本奴の手首を、十手で思い切り打ち据えていた。

「ぎゃあっ！」と悲鳴を上げ、旗本奴は手を離し、腕を押さえて地面に倒れた。他にもいないかと辺りを見回すと、芸者の真ん中に、大暴れしている巨体の芸者がいた。

吉弥だった！

俺と吉弥の目が合った。

「伊呂波の旦那！」

吉弥は、小柄な芸者の手を引こうとする旗本奴の頬下駄を、太い腕を振り回し、思い切り張り倒したばかりだった。

張り倒された旗本奴は、くると回転しながら、明後日^{あさって}方向に吹き飛ばされていく。これじゃあ、俺が救助に向かったのは、まるで意味がないよ！

吉弥は、俺を見て、喜びに目を糸のように細くした。

「旦那、あちしを心配して、助けに来ておくれなんだね？」

俺の背筋に悪寒が走る。

冗談じゃない！

十

吉弥の八面六臂^びの活躍で、俺たちは逃げ遅れた芸者たちを引き連れ、神田明神から大慌てで逃げ出した。吉弥が殿軍^{しんがり}を守っているの
で、ゆうゆうと逃走できる。

最後に、ちらりと振り返ると、乱闘の中で松戸検校が「わはははは！」と高笑いを上げ、鉄扇を手当たり次第に揮っている姿があった。

検校は顔一杯に闘争の喜びを漲らせ、奮闘している。実に、幸せそうだ！ 少なくとも、俺の趣味ではないな。

明神から昌平橋を渡って、駿河台方向へと足を向ける。もう、喧嘩騒ぎは聞こえず、辺りには静寂が戻ってきた。武家屋敷が立ち並んでいるせいだ。

俺たちが芸者をぞろぞろ引き連れているので、途中の町人、侍たちが奇異の目で見送っている。

どうしようかと思っていると、騒ぎを聞きつけたらしい、芸者たちを抱えている遊郭の牛太郎たちが、見当をつけて探しているところに行き当たった。これで俺たちはお払い箱だ。

牛太郎たちは口々に「いずれ、お礼に上がります」と丁寧に頭を下げて、芸者たちを引き取って行く。

俺は良い厄介払いと、喜んだ。

「ああ、お腹が空いた！ ねえ、ちょっと腹塞ぎで、蕎麦でも手繰^{たく}ろうよ！」

吉弥が能天気な大声を上げる。晶はポカンと口を開け、質問した。「あんたは、戻らなくて良いの？」

吉弥は、ぐい、と身を仰け反らせる。

「あちし？ あちしは勝手気儘な、自前の芸者だもの！ 伊呂波の旦那と良い所で出会ったから、これから、しつぽり……」
俺を舐めるような、実に不気味な視線で見詰める。蛇が蛙を睨む視線だ。

俺は、ぶるっ、と身震いをした。

「よ、よせ！ おれは、そんな趣味はねえ！」

晶は横目で俺を見る。

「ふうん。お似合いじゃない？」

吉弥は喜んだ。

「あら！ あんたもそう思う？ あちしと、伊呂波の旦那、お似合いだって言ってくれるんだねえ……」

パチパチと、俺を見詰めたまんま、瞬きを繰り返す。ぽつと、頬がピンクに染まる。

わあ！ やめてくれ！

何か言うと、また妙な勘繰りを晶がしそうなので、俺は吉弥に背を向け、ずんずんと歩き続ける。ちょこちょこ晶が近寄り、肩を並べて囁き掛けた。

「ねっ！ どうしてあの人を、そんなに毛嫌いするの？ 可愛そうじゃない！」

俺は晶をちらつと睨んだ。晶は、天真爛漫を、絵に描いたような無邪気な表情である。

俺は口一杯に頬張った苦蓬を、^{にがみも}吐き捨てるように答えた。

「だって、あいつ、正体は男だぜ！」

晶は目を見開いた。

「えーっ！」と大声を張り上げ、一拍、間を置いて、もう一度「ええ——っ！」と辺りに響き渡るような叫び声を上げる。

吉弥は、くねくねと身をくねらせ、不満そうな鼻声を上げた。

「旦那っ！ それは、言いつこなしだよお！ それに、あちしが男だったのは、昔の話じゃないか！ 今はあちしは、身も心も、真正銘の女なんだから……！」

玄之介が、両目を飛び出さんばかりに見開き「聞き捨てならぬ！」とばかり、大声を張り上げた。

「それは、本当に御座るか？ で、では、この江戸で性転換手術が……？」

「違う！」

俺は、大急ぎで訂正した。

「こいつは……吉弥は、本当は俺たちと同じ【遊客】なんだ。仮想人格の性別は、普通は本来の性別でデザインするが、こいつは男なのに、女の性別を選びやがった。つまり、電腦オカマってやつだ！」

吉弥は恨みを含んだ目つきになった。これが真正銘の女なら、それなりに色っぽい風情なのだが、吉弥がそれをやると、二本足で立ち上がった河馬か水牛に睨まれている気分である。

玄之介は首を捻った。

「となると、吉弥殿は我らと同じ【遊客】という事実になりますな。しかし……」

俺に向かい、尋ねかけるような目つきになる。

玄之介の言いたいのは、【遊客】ならなぜ自分たちに判らなかったのか、だ。【遊客】は、【遊客】同士、すぐに直感的に判り、正体を隠せない。また性別も判別できるから、吉弥のような電腦才力マはすぐ判る。

「こいつ、自分が男だつて判らないよう【遊客】の^{シゲナル}気配を消す技を習得しているんだ。【遊客】の気配を消している間は、【遊客】の能力は封印されるが、気配が判らなければ、見かけが女なら、相手にばれないからな」

俺の指摘に、玄之丞は「ああ、そうか」と納得顔になった。が、

晶はまだ小首を傾げている。

晶は、ゆるゆると首を振り、呟く。

「でも、そんなら、どうしてもっと……」

晶が口^{くちも}籠るので、俺が代弁してやる。

「もっと女っぽい仮想人格にしなかったのか？　と言いたいんだろっ？」

「うん」と素直に頷き、慌てて自分の口を押さえる。

俺は暴露を続けた。

「最初、出会った頃は、こいつも普通の女の姿をしていた。だが、吉弥は、この江戸で、飛んでもないポ力をしちまったんだ！」

吉弥の口がへの字に曲がっている。思い出したくもないのだろう。

俺はニヤニヤ笑いながら晶に教えてやった。

「？ロスト？って、知っているか？」

俺たちの間に、厭な静寂が走る。玄之介も、晶も、吉弥すら黙り込んだ。

いつの間にか、一同はゆっくりとした歩みになっている。晶が口火を切った。

「知ってる……。仮想現実接続装置の取扱説明書にくだいほど、注意されていた……。？ロスト？という大変な事態を引き起こさないよう、注意するようにって……」

「そうだ」

俺は大きく頷いた。

「仮想現実接続装置には、使用者の健康を守るため、安全装置が組み込まれている。接続しっぱなしで、七十二時間……つまり、三日間だな……過ぎると、強制的に接続が断たれるんだ。強制切断が起きると……」

俺の言葉に、玄之介が、大真面目な顔つきになって、後を引き取った。

「仮想現実には仮想人格は取り残される。使用者は仮想現実で過ごした記憶を失い、仮想現実に取り残された仮想人格は、コピーされた人格のまま立ち往生する……！」

俺は自分の胸をぼん、と叩いた。

「俺たちは、【遊客】として仮想現実には何度か足を運んでいる。接続するたび、仮想人格の初期データが更新されるから、いつまでもこの姿でいられる。が、？ロスト？しっぱなしだと、普通のNPCと同じに年齢を重ねるし、食っちゃ寝、食っちゃ寝の生活を続けりゃ、どうしたって肥満する状態になる。吉弥の本体は、どんな奴か知らないが、恐らく、大変な大食漢だったんだろうな。江戸でどんどん食い続け、今じゃ、あのざまだ！」

吉弥は拗ねたような顔付きで、足元の小石を蹴ったり、空を見上

げていたりしている。

不意に、吉弥の顔がくしゃくしゃと歪み、天を仰いで、大声で吠え声を上げた。

「ぐえええええーっ！」

吉弥の、糸のような細い両目から、どーっとばかりに涙が溢れた。泣いているのだ！

「口惜しいよおおっ！ 折角、伊呂波の旦那に、水死体になった前日の行動を教えて上げようと思っていたのに——っ！」

俺は今度こそ、本当に、心底から驚き魂消ていた。

「何だと！」

俺は、つかつかと吉弥に近づき、胸倉を掴み上げた。

「おい、もう一遍、言ってみろ！ 俺が死ぬ前、何をしていたっ！ お前、知っているのかっ？」

「知らないっ！」

吉弥は顔を真っ赤に染め、プイっと俺から視線を背ける。

俺は掻き口説いた。

「おいっ、頼むっ！ 何か手懸りがあるなら、教えてくれっ！」

「ぐうっ——！」と、吉弥の下腹部から空腹を訴える音が響く。

「あちし、お腹ぺこぺこだよお……」

吉弥は流し目で俺を見詰め、にんまりと笑いを浮かべた。

結局、吉弥の最初の提案通り、蕎麦屋へ行こうとなって、俺たちは手近な蕎麦屋に、どやどやと入り込んだ。

夏の盛りとあって、蕎麦屋は混雑している。客は大半、盛りを頼んでいる。

出された盛り蕎麦を玄之介は見て、顔を顰めて^{しか}いる。俺はちょっと、玄之介をからかう気分になってきた。

「どうした、玄之介の旦那。この蕎麦屋が気に入らないのか？」

玄之介はぶすりとした表情で、答える。

「食卓と、椅子とは、あまりに時代考証を無視していませんか？ 普通、江戸時代の食事所なら、座敷でしょう？ こんな机などで、当時の庶民は食べていないはずですよ」

玄之介の言葉通り、蕎麦屋に入ると、木の机と、腰掛ける椅子がずらりと並んでいる。確かに当時の江戸では、椅子に座って食事をする習慣はなかった。普通、座敷で、各々小さな卓を前にして食事をする。

俺は「はいはい」と頷いてやった。

「まあ、そうだ。だが、こっちの江戸じゃ、【遊客】が上客で金を払ってくれるので、【遊客】向けに、こんな形になったんだ。俺たちが強制させているわけじゃない。あくまで、江戸の町人の自主的な判断だよ」

「そっちの旦那は、【遊客】かね？」

隣の卓で、蕎麦を手繰りながら、冷やをちびちび飲んでいた、職人風の町人が話し掛けてきた。職人の食卓には、銚子が並んでいる。

これも玄之介の気に障る光景である。本当の江戸なら、銚子は使わず「ちろり」という金属の食器で、酒を爛して呑むのだ。俺が肯定の意味で頷くと、職人は、にやりと笑い掛けた。

「確かに【遊客】の連中が江戸に来るようになる前は、ここらは昔風だったがね。こっちのほうが、食べやすいなあ。何でもかんでも昔風を守るのは、どんなもんかね？ 時々、旦那みたいな【遊客】が文句をつけてくるがね。なぜ時代考証を守らない？ ってね！」

職人は、にいーっ、と目を細めた。

「時代考証って何か知らないが、俺たちは、やりたいようにやっただけさ！」

職人の言葉に、玄之介は腕組みをして、またまた考え込んでいる。

「お待ちどうぞさまでした！」

紺紺に、赤い前掛けの女給が、吉弥の前にどっさりと、大盛りの蕎麦を運んできた。それも五人前である。

さらに、大皿に天麩羅の取り合わせも付いてきた。これでも足りないのか、お櫃ひっごと飯が運ばれる。何を頼むにも、吉弥は他人の十倍は注文する。

さっそく、ばくばく食べ始める吉弥を尻目に、俺は冷や酒を、ちびちびと飲み始めた。肴は沢庵程度で、俺は、あまり食事を付き合わない。

仮想現実で食事を摂るという行為は、本体に悪影響を及ぼす。脳は、食事を摂ったという信号を受け取り、胃酸を分泌するよう、神経を刺激する。

結果、胃は空っぱなのに、胃酸が大量に出て、後で胸焼けや、胃潰瘍を引き起こす。仮想現実で、後先を考えずに平気で食事を摂れるのは、吉弥のような？ ロスト？ した【遊客】だけだ。

晶は、俺の隣に席を取り、囁き掛けてきた。

「ね、ちよつと聞きたいんだけど」

「何だ？」

「どうして、あの吉弥って人が、本当は男だって判ったの？ 仮想人格なら、完全に女の身体でいられるんでしょ？」

俺は、薄っすら笑ってやった。

「そこなんだな、勘違いするのは。確かに仮想人格なら、どんな身体をデザインするのも自由だ。男女の性別すら、無視できる。だが、男が女に、あるいは女が男に化けるのは、どうしても無理が生じる」俺は食事に夢中になっている吉弥に目をやった。晶も釣られたように、目をやる。

「確かに最初は、吉弥はどこからどう見ても、本物の女に見えた。俺ですら、ころりと騙された口だ。だが、ちよつと付き合つと、何か、ちぐはぐなんだ」

晶は首を捻った。

「男の仕草が出てきた、とか？」

俺は首を振った。

「違う！ むしろ、逆だ！ 吉弥は、過剰なほど女らしかった。まるで――そう、女が女の癖に、女装しているみたいだった！」

「ぷっ！」と、晶は吹き出した。目の前の吉弥が、女らしい仕草を懸命に演じている様を想像したのだろう。

「最初、出会った頃の吉弥は、ほっそりして、喜多川歌麿が描くような美人だったよ。だれでも振り返りそうな、美人だった。だが、やっぱり違和感があった。俺くらい、長く仮想現実で過ごしていると、そこら辺は、何となく判ってくるんだ」

俺は言葉を切り、晶を見詰めてやった。

「お前さんは、どうかな？ 本当のお前さんは、こんなお嬢さんなのかね？」

晶は、どきまぎなど余計な感情を見せず、むっとした表情を浮か

べただけだった。

「勝手に、そう思えばいいわ！」

おやおや、怒らせてしまったな。

吉弥はすでに食事の大半を平らげている。湯桶ゆづつを傾け、漬け汁を蕎麦湯で割って、その中に生卵を落として、ぐちゃぐちゃと掻き回している。それをぐいーつ、と一息で飲み干し、満足そうに吐息を洩らす。

うげっ！ 何という食事の締めだ！

俺は改めて吉弥に顔を向け、話し掛けた。

「そろそろいいだろう。吉弥、俺が死ぬ前、何があった？」

吉弥は「ちつつちつ！」と楊枝を使っていたが、俺の言葉に思い出したように、口を開いた。

「ああ、そうだったね！ 伊呂波の旦那は、品川で何か調べ物があるって、船頭の留吉に、川舟を頼んでいたよ」

「何いつ！」

大声を上げたのは、玄之介だった。玄之介の意外な反応に、吃驚したのは俺だった。

俺は玄之介の顔に視線を移した。眉間が狭まり、肩が上下している。玄之介は指先でがっしりと食卓を掴み、吉弥に襲い懸かりそうな勢いで尋問する。

「吉弥とやら！ その話、本当かつ？ 確かに、船頭の留吉と申すのだな？ 鞍家殿が舟を頼んだのは？」

「ああ、そうさ……」

玄之介の詰問に、吉弥は呆然と頷く。俺は玄之介に尋ねた。

「どうした、玄之介の旦那。留吉って名前に、何か心当たりでも？」
玄之介は、きつ、と俺を睨む。

「今朝方で御座る。若い男の死体が、品川で発見された、との報告が御座った。持ち物から、品川の川舟を漕ぐ、船頭の留吉と判明いたした。それがお主の件と、関わりがあるとは、今の今まで、ついでぞ思い浮かばなかったが、これで二つの線がぴたりと繋がりました！」

俺は玄之介の言葉に、引つ掛かった。

「死体、と言ったな？ どんな死体だ」

玄之介は軽く首を振った。

「真っ向から切り下げられた、刀傷が御座った。明らかに、他殺で御座る！」

俺は「そうか……」と呟く。

晶が目を光らせた。

「これで、伊呂波の旦那の事件は、殺人事件に決まりね！」

俺は深く頷いた。

榊原源五郎は、松原玄之介の報告に、深刻な表情を見せていた。
品川芸者の吉弥が、俺が死ぬ前、船頭の留吉と会っていた事実は、
重要だった。

俺たちはすぐ、吉弥を伴い、榊原源五郎の屋敷へ戻っていた。源
五郎は中々執務を中断する暇がなく、俺たちの話を聴取したのは、
その日も遅くなってからだった。

俺、玄之介、晶、吉弥、源五郎は顔つき合わせ、これからの捜査
方針を話し合っていた。

俺たちの報告は、顔をつき会わせる事前に、同心、与力などに聴
取して、報告書ができている。源五郎は、そういう手順は、堅苦し
いほどに守る。報告書を膝許に広げ、源五郎は顔を挙げ、口を開い
た。

「やはり、お主は殺されたのだな。どうにかして、お主がこの江戸
から遁走するのを防ぎ、水責めにしたのであろう。これは容易なら
ぬ事態であるぞ！」

腕組みして、ぼそぼそと喋る源五郎に、俺は憂鬱な気分で頷いて
見せた。源五郎は、事態が深刻なほど、このように、口許が重くな
り、喋り方がまどろこしくなる。

玄之介は俺を見て、首を傾げた。

「非常脱出手段を封じるとは、どのような手を使ったので御座ろう
か？」

俺は、さっぱり見当が付かず、曖昧に首を振っていた。

「判らん！　しかし、相手の正体は薄っすら、判り掛けてきた」

俺の言葉に、源五郎と、玄之介は緊張した表情になった。

「どう、判ったというのじゃ？」

源五郎の詰問に、俺は頷いた。

「少なくとも、俺を殺した相手は、【遊客】だろう。この江戸の、悪党ではありえない！　江戸で悪党は、星の数ほどいるが、俺の非常脱出手段を封じるなど、不可能だ！　恐らく、特殊な結界を作っているのだ」

源五郎は、皮肉そうな笑みを浮かべる。

「何やら話が、玄妙奇っ怪になってきたのう……。結界とは、何じや？　奇門遁甲の一種であるか？」

奇門遁甲とは、御存知、忍術の別名である。が、言葉の定義は曖昧で、神秘主義への傾きを内包している。朱子学で「怪力乱神を語らず」という孔子の言葉を信奉している侍としては、ウカウカと話を合わせるわけにはいかないのだろう。

「そんなんじゃ、ないさ……」

俺は、源五郎に、どう説明したものか、と途方に暮れていた。源五郎は、職務上、俺たち【遊客】と付き合いが長く、【遊客】については、割合と理解している。

が、結局は、江戸人としての知識しか持ち合わせず、仮想現実がどのように構築されているかは、想像すらできないだろう。

しかし玄之介と、晶の二人は【遊客】である。俺の推測の、重要な部分は理解して貰えるはずだ。吉弥は……というと、退屈してい

るのか、鼻糞をほじって、指で丸めている。

「多分、相手は【遊客】で、しかも、プログラマーだ。仮想現実には外部から干渉を拒否するコードを上書きしているのだ。それで、俺が非常脱出しようとしても、ブロックして、できなくなったのだ」

二人はポカンとした表情で、俺をまじまじと見詰めている。晶が、おずおずと話し掛けてきた。

「ねえ、あんたの話、全然っ、意味が判んないんだけど！ あたしにも判るよう、説明してくれない？」

玄之介は、と見ると、やっぱり俺の台詞を一言も理解していないのは、一目瞭然であつた。俺はガツクリとなつた。

「ふうむ……。相手は上位優先権のある、プログラマーだね……。仮想現実のプログラムを書き換えるとは、信じられないよ……」

吉弥が、太い腕を組み、天井を見上げながら呟いた。玄之介と、晶が、吉弥を呆然と見やつている。意外や意外！ 吉弥は俺の説明を、完全に理解していた！

玄之介が「こほん！」と、わざとらしく、咳払いをした。

「敵が【遊客】なら、悪党属性を申請した【遊客】がこの江戸にいるかどうか、確かめてみる必要が御座るのではないかな？」

俺は、玄之介の提案に、大いに頷く。

「そうだ！ もし、悪党属性を申請している【遊客】なら、何らかのデータがあるかもな」

悪党属性とは、俺たち【遊客】が、江戸に登録する際、悪人としての活躍をしたい場合、申請する手続きである。

たいていの【遊客】は、自分が時代劇のヒーローになりたくてやつてくる。ところが、たまに、時代劇の悪人を演じてみたいという物好きも少数ながら存在する。現実では小さな、生真面目な人間が、

こちらの江戸ではガ拉里と変貌して、悪人として活躍する事例は、結構あるのだ。

当然、【遊客】としての能力も持ち合わせ、江戸のNPCには圧倒的な支配力を顕す。敵に回せば、恐ろしい相手だ。

源五郎は、俺たちの会話を大半、理解できていないようで、不機嫌そうになっていた。しかし、玄之介の、最後の台詞には反応していた。

「【遊客】の悪党か……。しかし、それを確かめるには、お城に参らねばならぬぞ！」

「うへえ……」と俺は、源五郎の言葉に、首を竦める。

そうだった！【遊客】、一人一人のプロフィールを保存している記録庫の紅葉山文庫は、お城にしか存在しないのだ。

お城——つまり江戸城である。

二

俺は翌日、坂下門を前に立っていた。紅葉山文庫を訪問するには、この門を潜る。

隣には、玄之介がポカンと口を開け、馬鹿のようにして江戸城を見上げている。

俺は【遊客】で、しかも江戸創設メンバーであるから、特別の資格があつて、江戸城には、いつでも登城できる。

玄之介は与力であるが、【遊客】でもあり、供として登城できるのだ。女の晶は、同道できないので、お留守番だ。

俺たちはこの日のために、肩衣、袴、紋付と正式の袴姿であつた。こんなしゃちこぼつた、堅苦しい格好をしなければならぬから、俺は極力、お城には近づかない方針であつたが、どうしようもない。

「あれは、何で御座る？」

玄之介が、呆れ果てたといった表情で、ぼんやりと腕を挙げ、江戸城の一画を指さす。俺は、強いて無表情を保ったまま、答える。

「何って、天守閣に決まつてるだろう！」

玄之介は、憤然となつた。口許がきりりと引き締まり、何か言いたそうである。

「判つてゐる。江戸の歴史の大半、江戸城には天守閣は存在しなかった、と言いたいんだろう？」

俺は、玄之介の機先を制してやつた！ 玄之介は、口をパクパクさせているだけだ。さぞかし、時代考証について、長々と高言をのたまいたかつたのだろうが。

本丸の辺りには、竹櫓が組まれ、壁が塗られ、屋根には職人が多

数働き、瓦をせっせと葺^ふいている。

天守閣の、再建工事である。ほぼ、工事は八割がた完了している。この分では、さ来週には落成を見るだろう。

俺たちの江戸では、最初、史実通りに、江戸城には天守を置かない方針だった。しかし、やってくる【遊客】たちの「なぜ天守閣を作らないのか？」というリクエストが多数寄せられたため、方針を変えた。

それに、天守閣工事には、かなりの額の予算が計上されるから、景気刺激策にもなる。エジプトのピラミッドが、当時の農民にとつての、農閑期に仕事を提供するための、公共工事であつたというのと、まったく同じである。

当初は、三代將軍家光の再建した天守閣にするつもりだったが、時代劇で登場する天守閣の外観に馴染みがあるという理由で、姫路城のデータを流用している。

俺たちが登城する際には、七面倒な手続きが必要だ。それらは大半、火付盜賊改方である、榊原源五郎の配下がこなしてくれたが、俺たちもまた、江戸城に入るには、ぶらりと散歩がてら、とは行かない。

あまりくだくだしい説明は省こう。ともかく、坂下門から俺たちの人物同定のための番所で、念入りに身分、用向きなどを確かめられ、百人番所でも、またまたチェックを受ける。ようやく、目的の書物同心の前に出た頃には、俺たちはへとへとになっていた。

途中、源五郎から、茶坊主に賄賂を渡すよう、念入りに忠告されていたので、俺は懷にたんまり、小銭を用意していた。俺は小判でもいいのだが、額が多すぎるのも、トラブルの元だと聞かされた。

この、茶坊主にさりげなく賄賂を贈るというのも、技術がいる。タイミングを計って、他人目を避け、自然に渡さねばならない。ともかく、二度と御免である！

「江戸の【遊客】について、情報がお入りだそうですね」

俺たちを応対したのは、書物同心の、吉川という、五十代頃の、福々しく肥満した侍だった。江戸城の、通称「紅葉山文庫」を管理する、書物奉行の配下である。

もっとも、江戸時代中は、紅葉山文庫とは呼ばれておらず「楓山文庫」または単に「御文庫」とのみ、呼ばれていたようだ。しかし紅葉山というのが、通りが良いので、俺たちの江戸では、こっちの呼称で通用している。

文庫が、今の図書館であれば、書物同心は司書にあたる。

同心の質問に、玄之介が答える。

「はっ……、江戸において、悪党供の不穏の動きが見られるため、少々お力を拝借いたしたいと……」

玄之介は吉川に向け、紫色の包みを、畳表に滑らせる。吉川はちらつ、と包みを見やると、視線を明後日に向け、偶然のように懐に仕舞いこむ。まことに、鮮やかな手並みだった。

もちろん、賄賂である。むしろ、手数料の意味合いが大きい。

「では、御同道を願いたい」

吉川は、さっさと立ち上がり、俺たちを案内してくれた。

三

紅葉山文庫は、実際の江戸では、歴代將軍や、老中、その他、江戸を統治するための様々な役職の者が閲覧できるよう、資料を保管するための図書館であった。記録は膨大で、今で言う国会図書館にあたる。

書物奉行は、文庫を管理する役職であるため、識見に優れた優秀な人材が就く。同心もまた、奉行の手足となつて働くため、優秀な人材が抜擢された。「甘諸考」^{かんしよ}を著した、青木昆陽は、有名な書物奉行である。

建物の内部に入ると、紙の匂いが籠もっているのを感じる。天井にまで達する、巨大な書架がずらりと並び、冊子、巻物などが、箱詰めされ、所狭しと置かれている。反古の類も、大事に保管され、あちこちでは、古い記録を筆写する同心の姿が見られた。

うろろろしていると、俺たちを案内した吉川という同心が「この素人め！」と言いたそうな、目つきになる。

「ここは、お上の記録を主に保管して御座る。御両所の所望される【遊客】の記録は、また別の場所御座る」

吉川の声は、囁き声だ。文庫は、しんと静まり返つて、針一本、床に落とした程度でも、筆写する同心たちに睨みつけられそうだ。

俺は玄之介の顔を見て、ちょっと驚いた。

玄之介の奴、文庫に足を踏み入れた時から、まるで夢を見ているような、ふわふわとした顔つきになっている。

「素晴らしい……。ここに、江戸の総ての記録が収められているん

ですねえ……。ああ、この記録を総て閲覧できたら……！」

口調は完全に侍から、現代人になっている。

「だって、お前さん。別の江戸で暮らしていたんじゃないのか？
そっちの江戸でも、文庫は、あったはずだが？」

玄之介は首を振った。残念そうな表情を浮かべている。

「そうなんですが、あっちの江戸じゃ、私ごときが、江戸城に参るなど、夢も夢……。何しろ、与力の役職すら、与えてもらえなかったんです。あちらでは、私は、ただの農民でしてね……。侍になるには、厳しい試験が待っているのですよ」

「そりゃ、初耳だ！　どんな試験だい？」

「四書五経を修めているのはもちろん、剣道は少なくとも初段の腕前は必要ですし、家系を調べて、実際に江戸時代に侍の祖先がいると証明できないと、侍の身分は与えられなかったのです。私は調べに調べたのですが、とうとう、侍の先祖を確認できませんでした」

俺はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆れ果てていた。何という硬直した仕組みだろう。

思わず、大声を上げていたらしく、あちこちから「しーっ！」「この慮外者！」という叱り声が響く。

吉川は大慌てに俺たちを手招きする。俺と玄之介は、ちょこちょこと盗つ人のような足取りになって、その場を通り過ぎた。吉川の顔は、怒りのため、真っ赤になっていた。

一言「お静かに！」と囁いただけで、あとは唇を固く引き結び、顎をぐっと上げて歩き出す。

むろん、足音は立てない。俺たちも、神妙に従った。

狭い廊下を歩き、俺たちは【遊客】専用の、資料室に入った。

「では、お調べなされよ！　御両所のお調べが終われば、その壁の

……」と、指さす。吉川の指差した方向には、天井から紐が一本、垂らしてあった。

「紐を引けば、拙者に伝わり申す。それでは、よしなに……」

部屋はごく普通の日本家屋であるが、こちらでは小仏関所にあつたのと同じ、書見台を模したディスプレイが並んでいる。

タッチ・ペン
触筆を取り上げ、軽く表面に触れると、いくつもの項目が、ずらずらと並んだ。

江戸に入府する【遊客】たちは、最初、必ず関所を通過しなければならぬ。その際、人定調査を受けるから、データは直接、電脳空間を介して、文庫に届けられる。そのデータが、示されるのだ。玄之介は早くも、背中を曲げ、食い入るようにしてディスプレイに見入っている。

俺は、江戸城に登城する前、晶と交わした、短い会話を思い出していた。

「あのう……頼まれて欲しいんだ！」

晶は、もじもじとして、言い難そうに俺の顔を見上げる。瞳に、必死の色が浮かんでいた。

「何だよ？　言ってみろよ」

「できたら、大工原激だいくはらげきっていう名前の【遊客】が、こっちに来ているかどうか、調べて欲しいんだ……」

俺は拍子抜けした。

「それが、お前の頼みつてのか？　名前を調べれば良いのか？　他にはないのか」

晶は「ないわ！」と首を振る。晶の表情は、俺に断られたらどうしようと、思い悩んでいた。俺は頷いてやった。

「そりゃ、いいが……。そいつは誰だ？ お前の、これか？」

親指を立ててやったら、見る見る晶の顔は真っ赤に染まった。地団太を踏んで、怒りの声を上げる。

「そんなんじゃ、ないったら！ あたしのお兄ちゃんなんだ！」

俺は益々、驚いた。

「お前の兄？ どういう事情があるんだ？」

しかし晶は、俺の問い掛けには一切、答えようとはしなかった。

いったい、晶はなぜ、調べて欲しいと言い出したのだろう。兄というなら、直接、現実世界で聞き質せば良いのに。それができないのは、どんなわけがあるのやら……。

まあいい。名前を調べるのは簡単だ。

俺は索引を呼び出し「大工原」という苗字の【遊客】のデータを参照し始めた。

と、俺の触筆の動きが止まる。

隣でディスプレイを見詰める玄之介が、軽い呻き声を上げていた。
「何たる事態だ！ 訳が判らん……」

玄之介の呟きに含まれた感情は、完全な戸惑いであった。俺もまた、同じ感情を味わっている。

俺と玄之介の目が合った。俺は口を開いた。

「お前さんもか？ 信じられないが、お互い、同じ考えらしいな」
玄之介はゆっくり頷き、返事をした。

「そのようで御座る。拙者の考えが確かなら、紅葉山文庫の【遊客】に対する総ての資料が、何者かの手によって、全面的に削除されております！」

四

俺たちの報告を受けた、書物同心の吉川は、見つともないほど、取り乱していた。

「まさか！ 総ての資料が、消え去っていると申されるのですか？ 信じられませぬ！」

小刻みに首を振り、肉付きの良い頬が、たぶたと揺れた。

顔色は真っ青で、今にも倒れそうだ。頼むから、俺の目の前で倒れないでくれよ！ こんな脂肪の固まり、抱えるのは一苦労だ！

「三日前までの資料が、全消去されている。その後の、江戸に入府した【遊客】の資料は保存されているが……。しかし、江戸開闢以来の、資料は完全に消え去っているな」

俺は書見台を前に、吉川に説明した。

吉川は苦悶の表情を浮かべ、頭を抱え込んだ。

三日前！ つまり、俺が何者かに、江戸で殺され、水死体で発見された翌日である。それ以降の情報は保存されているから、俺の名前も表示されていた。

晶の名前も見える。それによると、晶の本名は「大工原晶」とあった。やはり、大工原激というのは、兄らしい。

俺は首を捻り、考え込んだ。

なぜ【遊客】の資料を、総て消去したのか？ 理由がまったく、判らない。

「失態だ！ 拙者の怠慢で御座る！ 定期的に、【遊客】の情報は

確認する決まりであつたが、拙者は忙しさに取り紛れ、つい怠つてしまつた……！ ああ、どうすれば良いので御座る？ お奉行様に、どう言い訳を致せばよいのやら……！」

吉川は、おろおろと自問自答している。

俺は慰めにもならないが、一応は忠告してやつた。

「正直に報告するのが一番だぜ。善後策は、その後だ」

「左様で御座るな……。しからば、暫時、失礼致す。これより、書物奉行様に、報告まいらねばならぬ……」

吉川は朦朧とした顔つきで立ち上がり、ふらふらと頼りない足取りで立ち去っていく。

俺たちはもう、ここには用事はない。収穫の全然ないまま、俺たちは紅葉山文庫の外へ出た。

紅葉山文庫の建物は、奥行き十五間、幅三間の細長い建物が四棟並んで、一棟まるまる書庫であつたから、蔵書数の膨大さが判る。

一説では、幕末期には、十万冊の蔵書があつたとされる。

紅葉山の名の通り、秋には見事な紅葉を見せるが、今は夏の盛りで、新緑の中、東照宮の建物が沈んでいた。

家康を東照神君として祀る建物で、日光と紅葉山の他に、久能山、水戸、東本願寺、世良田、滝山、鳳来山、松平郷、名古屋、岡崎、飛騨、日吉、和歌山、越前、仙波、鳥取、仙台、岡山、広島、弘前、船橋、石見銀山に建てられ、將軍家にとっては、特別の場所である。

実際の江戸では、家康の命日にあたる十七日、歴代將軍が紅葉山東照宮に参拝する慣わしであつた。

しかし、こちらの江戸では、將軍は江戸創設の、中心プランナーが務めているので、東照宮は、ただの記念碑的な意味合いしかない。

西ノ丸の向こうに、工事中の天守閣が聳えているのが良く判る。
あちこちに工事の資材が置かれ、職人がきびきびとした物腰で働いている。

工事を監督する普請方の役人が、帳面と、進捗状況を照らし合わせていた。

俺たちはその場を通り過ぎようと歩いていたら、役人の一人が、こつちを見て、驚きの表情を浮かべた。俺の知り合いか？

相手の顔を見直し、俺は舌打ちした。

「おい、急ぐぞ！」

玄之介の袖を引き、早足になる。

「鞍家殿、何をお急ぎなのですか？」

「いいから、急げっ！」

俺は小声で叱咤し、足を急がせた。

——おおーい……。

背後で聞こえた伸びやかな堂間声に、俺は益々足の回転を速めた。
いかん！ 気付かれた！

五

ばたばたという足音が近づき、すぐ背中に声が掛けられる。

「鞍家二郎三郎！ 珍しいではないか！ お主がお城に登るのは、初めてだな！」

俺は諦め、足を止め、振り返る。

「ああ、ちよつとした用があつてな。これから帰るところだ」

相手は「いやいや」と首を横に振り、ニヤニヤ笑いを浮かべていた。背が高く、六尺……百八十センチは越えている。遅い身体つき、ギリシャ彫刻のような美男子という形容がぴったりの侍だった。

彫りの深い顔に似合わない、下卑た笑いを張り付かせ、俺を「逃がさんぞ！」と言いたげに睨みつけている。

身につけるものは、どれもたつぷり金が掛かっていそうである。
ぞうがん象嵌が入った鐔つきの両刀は、柄は白柄、柄頭に金細工。足下は白足袋で、福草履を履いている。着物は卸し立てのように折り目がついて、染み一つない。

外見、衣服など、どれも完璧であつたが、唯一つ、男のどうしようもない品性のなさが、全身から滲み出てくる。

えこだもん荳子田多門。俺が最も、この世で会いたくないと切望している【遊客】である。俺と同じ、江戸創設メンバーで、当初は俺と同じ担当であつた。

が、一緒に江戸創設をしているうち、こいつの性格というのが段々と判ってきて、俺は極力避けるようになっていた。

ともかく、こいつは、品性が卑しい。下品そのものの言動に、他人を陥れるのが生き甲斐という最悪の人物だ。しかも、自分是他より高潔な性格をしていると、心の底から思い込んでいる。

こいつを嫌っているのは、俺だけではない。俺と一緒に働いたメンバー総てが、嫌っている。しかし奴は、執念深く江戸創設メンバーの位置に留まり、今では幕府の中核に食い込んでいる。

能力はある。奴の担当は、時代考証と、江戸NPCの性格デザインである。江戸町人らしい物腰、言葉遣いなど、奴がいなければ、江戸町人たちは存在しなかった。奴の存在は、江戸創設で相当に大きい。

しかし、できるなら、一生ずーっと顔を合わせたくはなかった！

玄之介は、ポカンとした顔つきのまま、所在無げに突っ立っている。

多門は、じろじろと俺の全身を舐め回すような視線で眺め、口を開いた。

「お主、死んだと聞いたが？」

俺はちよつと仰け反った姿勢になる。

「どこで知った？」

俺の反応に、奴は得意げな表情になる。早耳がこいつの特技で、他人の弱みや、欠点を粗探あらいがするのが、大好きなのだ。もちろん、自分が優位に立つためである。

「ま、色々とな……。それよりお主、どうして、のこのこ、お城に上がったのだ？ お主は我々の再々の登城の要請に、頑として応じなかったではないか？ どういう風の吹き回しなのだ？」

俺は、ちょっと考えを変えた。こいつの早耳は恐ろしいほどだ。もしかすると、奴が俺たちの役に立つかもしれない。

「紅葉山文庫に用があつてな」

「御文庫に？」

多門は、きちんと「御文庫」と正確な物言いをする。時代考証担当だけは、ある。

「そうだ。文庫にあった、江戸開闢以来の【遊客】情報が、一つ残らず消去されていた。どう思う？」

「何だと！」

思ったとおり、多門は俺の投げた餌に、ぱっくりと鮫のように食い付いてきた。

両目が爛々と輝き、陰謀の期待に唇が笑いに歪み、今にもたらたらと涎が零れ落ちそうである。

多門の頭の中が、高速で回転している状況が、目に見えるようだ。俺の投げかけた情報が、どのように自分にとって有利な情報に化けられるかと、猛然と計算しているのだろう。

ようやく、多門は俺の隣にぼんやりと立っている玄之介に注意を振り向けた。一瞬にして、多門は玄之介が自分と同じ【遊客】であると判断したようだ。

俺たち【遊客】は、一目ちらつと見るだけで、相手が【遊客】か、NPCであるか判別できる。そうでないと、色々と不都合が起きる。【遊客】相手に、NPCに対する気迫を発動させても、無駄だからだ。

「そちらの御仁は？」

玄之介は不機嫌を押し隠し、自己紹介をした。今の今まで、完全に無視されていたのである。腹が煮え繰り返っても、不思議はない。「松原玄之介と申します。火付盗賊改方与力として、鞍家二郎三郎殿の事件を捜査しております。よろしく……」

「ほほう……。火盗改の与力を……。それは大変なお仕事だ！ いや、感服いたしました」

多門は顎を挙げ、言外に嘲笑するような含みを孕^{はら}んで返答する。意識する、しないに関わらず、こいつの言葉遣いには、一瞬で相手を不快にさせる響きがある。

「何か判ったら、報せてくれ。連絡先は、火付盗賊改方頭の、榊原源五郎に寄越してくれば、つく手筈になっている」

俺の言葉に、多門は「心得た！」と短く答えた。

今日のところは、これくらいでいいだろう。

俺は何か考え込んでいる多門を残し、江戸城を後にした。

六

榊原源五郎の屋敷へ戻る途中、玄之介はぷりぷりと怒りを顕あらわに
して俺に尋ねる。

「いつたい、あの荏子田多門と申される御仁は、どのような人物な
のです？ 鞍家殿とお知り合いのようでしたので、我慢いたしましたの
ですが、何たる無礼な侍なのでしょう！」

俺は玄之介に同意して、頷いてやった。

「あいつは、最初の対面の、僅か三秒で人に嫌われるという特技の
持ち主なんだ。俺たち江戸創設の中心人物でね。プログラムの腕は
抜群で、あいつがいなければ、江戸町人は存在しなかった……」

多門の説明をしているうち、俺の頭にある考えが閃いた。もしか
すると【暗闇検校】と名乗る相手は、江戸創設メンバーの誰かかも
しれない。江戸創設メンバーなら、プログラムに手を加え、【遊客】
情報を消去するなど、簡単なはずだ！

しかし、相変わらず動機について、疑問が残る。【遊客】情報を
消去したのはなぜかというのと、俺をわざわざ水死体にした理由。
俺を殺したのは、相手の秘密に近づいたためだろうが、依然とし
て【暗闇検校】の動機が、さっぱり判らない。

源五郎の屋敷に近づくと、周囲が慌しい気配に包まれている。い
や、もっと正確に表現すると、殺気立っていた。

屋敷の内部に入り込むと、多数の与力、同心たちが各々武器を点
検し、手先の何人かは捕縛用の縄を用意している。刺股さすまた、梯子はしこなど
を持ち出し、明らかに犯人捕縛の準備だ。

その中で、左内老人がせかせかとした足取りで歩き回り、声を張り上げている。

「よいか！ 相手は名うての盗賊一味！ おさおさ準備を怠るでないぞ！ これ、縄は投げかけやすいよう、きちんと輪にして手に持たぬか！ ええい、儂の若い頃なら、もっと手早い準備ができたものを……！」

苛々と両手を振り回し、顔を真っ赤に染めている。

騒然とした中で、晶が興奮した様子で駆け寄ってきた。

「あつ！ やつと帰ってきた！ ねえねえ、大変！ 盗賊一味の【火祭り豆蔵】つてのを、今から逮捕しに行くんだって！ あたしも岡っ引きの一人として、従いて行くんだ！」

晶は目をキラキラと輝かせ、一気に捲し立てた。

俺は呆れ果てた。

「お前が？ 本気か？」

晶は、どこで憶えたのか、ぐいっと鼻頭を手の平で擦って、にっと笑った。

「当ったり前じゃん！ あたしだって、ちゃんと岡っ引きの一人なんだもの！」

俺は玄之介を振り返った。

「【火祭り豆蔵】つての、知ってるか？」

玄之介は緊張した様子で頷く。

「ええ、お頭がこのところ没頭している捜査で、盗みに入った家に、かならず放火するという悪質な手口で有名な一味で御座る！」

既の方角から嘶いみなぎきが聞こえた。

捕り物の用意を整えた、榊原源五郎が、手綱を握り締め姿を現す。頭には鉢金を被り、手にはぶっ太い特大の十手を握っている。

小者が源五郎の座乗する馬の口取りを務めているが、馬は興奮しているのか、しきりと足掻^{あが}いて首を左右に振っている。

源五郎は馬上から俺たちに気付き、軽く頷いた。

「お城から帰って来たのじゃな。すまんが、お主たちの報告を受けるのは後じゃ！」

俺は源五郎を見上げ、叫んでいた。

「捕り物だつてな！ 俺の手伝いが必要かね？」

俺の言葉に、源五郎はにやつと笑った。

「お主が手伝ってくれるなら、有り難い。相手は凶悪な一味でな。手はいくらあっても、足りぬ！」

源五郎の言葉に、俺は奮い立った。

このところ、俺は自分でも似合わない地味な捜査で、ほとんど疲れ果てていた。やっぱり、身体を動かす、派手な場面に飢えていたのだ。俺は元々が猪突猛進型で、刑事の柄じゃない！

玄之介も、ずい、と一歩前へ出る。

「お頭！ それがしも！」

源五郎は頼もしく頷く。

「おおとも！ 玄之介、お主の手柄の立てどころじゃぞ！」

普段は地味で、これが火盗改かと思うような源五郎であつたが、今は別人だ。両目は鋭く輝き、背筋がぴんと伸び、覇気が全身から立ち上っている。

かつかつかつ！ と器用に輪乗りをすると、源五郎は馬の鼻先を、正門に向けた。

「開門——っ！」

左内老人がどこから出すのかと思われるような甲高い声を上げると、さつと屋敷の正門が左右に開け放たれる。

源五郎は馬の腹に、とん、と軽く蹴りを入れる。馬は、弾かれたように、正門から飛び出した！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0452z/>

電腦遊客

2012年1月9日21時56分発行